

# 幼 兒 教 育

第 三 十 四 卷 四 月 號 第 四 號



東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 內  
日 本 幼 稚 園 協 會

廣島文理科  
大學教授  
文學博士  
久保良英  
先生新著

# 兒童研究所紀要 卷十六

大判洋綴背皮クローリス製天金  
冊一全裝洋判大  
餘百圖參金價定  
錢拾五圓參金價定  
錢二十廿金料送

久保博士等同好の士  
が將來國家構成に重  
要な役割を待つ兒童  
を心理學的・生理學  
的に研究して純粹な  
學的立場から貴重な  
成果を發表せる本紀  
要は恒に教育家の本  
新知識の藪たり

## 新刊 第六卷內容目次

兒童の類型、特に直觀像に就て  
兒童の直接記憶及知覺の發達に關する一研究  
紙上テストと器械テストとの比較  
一、女兒童の發育日記  
圖畫教育としての繪物語  
小學兒童の操作と入學後四ヶ年間の  
入學當初の成績と入學後四ヶ年間の  
成績との關係  
小學兒童の成績と入學後四ヶ年間の  
成績との關係  
女學校に於ける體育測定の試み

文學博士 清水榮長  
文學博士 久保良英  
岡須賀子  
波多野勤保  
守田保  
文學博士 久保良英  
文學士 古賀行義  
松本順之

### 合 輯 定 價

1	2	3	4
金九圓五十錢	金九圓五十錢	金九圓五十錢	金九圓五十錢
5	6	7	8
金拾圓五十錢	金拾圓五十錢	金拾圓五十錢	金拾圓五十錢
9	10	11	12
金拾圓五十錢	金拾圓五十錢	金拾圓五十錢	金拾圓五十錢

新刊 14 15 16 合輯

大判洋綴背皮クローリス製天金  
紙數二千二百頁挿圖四百餘  
定價金十圓五十錢  
送料四十五錢

應用心理研究會編

久保良英主任

# 應用心理研究 第二卷

第二卷

## 內 容

人は利益なしに働くか  
臺灣に於ける氣候と作業能率との關係並にその内差人比較  
學齡兒童の個性調査再論  
犯罪少年の個性調査再論  
保護少年と文身の印象  
鏡技に對する意見の決定  
ダウイッド・モルガンの訪ねて  
ロイド・マン教授逝く

醫學士 醫學士 醫學士 醫學士  
醫學士 醫學士 醫學士 醫學士

上力高谷松古武久桐  
一會費一年三回發行  
送一冊七年貳  
丸野料七十  
野陽六  
眞眞  
原保政賀  
森良太  
見英郎義郎信博圓一鏡錢圓行

振替電話 東牛 東牛 東牛 東牛 東牛 東牛 東牛 東牛 東牛 東牛  
發行所 東京市牛車水區 中野區 文館書店

# コドモノテンチ

五月五號がしました 定価十五銭 郵税二銭 五年一〇八・二年半 〇六

五月の空に翻へる鯉幟のやうに

## 幼稚園の先生方へ

**編輯 顧** 新らしく入學者をお迎へになつて、今年の新しい御抱負を豊かにお持ちの先生方には、又幼児の讀物についても一層の御注意を御拂ひのこととせう。

**編輯 問** 本誌は先生方の御期待にそむかぬやう、幼稚園及小學校初等科の教育の主義精神に則つて生れたものです。

**倉板** 本誌の出現はあらゆる歐米の幼児教育思潮をも参考し、しかも日本幼児の最よいお友達として恥ぢないものです。

**橋倉** それ故全国の幼稚園、小學校及御家庭より毎號すばらしい賞讃を受けてゐます。

**惣賛** 猶一層御批評を廣く伺ひたいために、先生方の御申込みに限らず、よるこんで贈呈致します。どうぞ、どしどし御批評をお寄せ下さいませ。

**三治** 編輯子ばいつも熱心に皆様の御批評を伺ひ、本當によい繪雑誌を次々と御目にかけることに努力してゐます。

## 小學校の先生方へ

元氣と希望と喜びに溢れた『コドモノテンチ』

## 本 號 目 次 概 要

表紙(ツバメ)	鯉のぼり(端午の節句)	五月の花	ちよほり	タケノコ(童話)	飛行馬のピンチヤン(漫畫)	ハルノ川(童話)	汐干狩(貝のいろく)	ウサギ(童話)	兵隊ごっこ	おたまじやくし	日本海大海戦	カハイイボ子	カゾヘカチ	オタマジャクシ(童話)	キンタラウ(繪噺)	セトモノノデキルマデ	ナニヌネノ(讀方・書方)	ワシトモグラ(漫畫)	フシツクラ(手技)	ウサギトイヌ(繪手本)	ドイトツノオオツリノアソビ	ゴム風船	キンタラウ(裏表紙)	附録タマテバコ	曲譜ご振付	お母様方へ
清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄	清水田庄

東京曙 本郷一十町 子供の天地社 電話大塚(86)五三〇六 東京四九〇四

# 長尾 豊先生著 《最新刊》

四六判美装一三〇頁 價一圓  
 樂譜凸版三十六挿入 (送料八錢)

## 幼稚園 おゆうぎ

《豊かな親切な内容！》

ゆびあそび

ひよこのかあさん  
 ここのこもん  
 井戸さん  
 おいけのあめ  
 おすなふるひ

オリガミばなし

さんかく山  
 お襦袢  
 お屏風借りに

そのほかのゆうぎ

よい子がこのみち  
 こちらむき  
 でてむしり  
 てさばり  
 入れかはり  
 「鬼」なきめる  
 なにが出たせう  
 かごのなかのとり  
 入れちがひ  
 立てやホイ  
 だれでせう

第一に面白い。そして  
 新しい。實際、行詰つて  
 るる 《おゆうぎ》に明  
 るい光を齎らすものだ

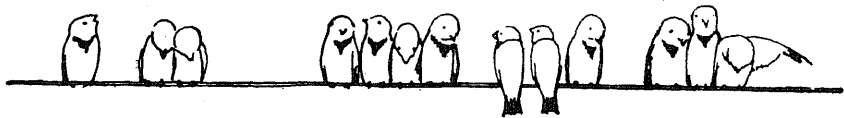
\* これなら、何か目新しくして子供の興  
 味にびつたり合ひ、然も柔かい《あそ  
 び》の地面によい教育の芽を植ゑつけ  
 ようとする心ある人々の喜びを買はず  
 にをかかない。繪があり樂譜があり總振  
 假名付だ。先生や家庭に是非一本を！

閣生厚

町番六下町麴・京振  
 番〇〇六九五東  
 [呈進料無録目書圖]

小瀬 峰洋氏著	幼稚園の舞踊	價〇・八〇	送〇・八
石井 小浪氏著	舞踊	價〇・八〇	送〇・八
石井 小浪氏著	舞踊	價〇・八〇	送〇・八
北村 久雄氏著	學校舞踏三十四講	價一・〇〇	送〇・八
齋藤・梯兩氏著	學藝會運動會の新研究	價二・八〇	送一・四
齋藤・梯兩氏著	兒童陸上競技の指導と實際	價二・八〇	送一・四
厚生閣編輯部	動作のつとやさしい唱歌(正續)	價一・〇〇	送〇・八
馬場 二郎氏著	音樂の基礎 智識	價三・二〇	送一・四
齋藤 薫雄氏著	體育 新心理學	價二・三〇	送一・四
齋藤 薫雄氏著	小學校遊戯競技全教材の指導	價一・五〇	送一・四
青柳 善吾氏著	音樂教育の實際問題	價二・〇〇	送一・四
伊庭 孝氏著	日本音樂概論	價八・五〇	送二・四
草川 信氏著	歌ひ方のつと小學三四年の唱歌	價〇・八〇	送〇・八

永澤 義憲氏著	幼稚園教育の實際	價一・八〇	送一・四
長尾 馨氏著	幼稚園の實際	價一・八〇	送一・四
河野伊三郎氏著	童話鑑賞の實際	價二・一〇	送一・四
長尾 馨氏著	童話と其味ひ方解説	價二・一〇	送一・四
三森 連象氏著	幼稚園や低學年の生活圖書指導	價二・六〇	送一・四
草川 長尾兩氏著	唱歌あそびと小さい唱歌劇	價一・〇〇	送一・四
長尾 馨氏著	お話あそびと小さい劇	價一・六〇	送一・四
坊田かずみ氏著	やさしい獨唱と輪唱曲集	價一・二〇	送〇・八
長尾 馨氏著	短い對話と小さい劇	價一・六〇	送一・四
長尾 馨氏著	短い對話と小さい劇	價一・八〇	送一・四
北崎 永榮氏著	先生としてのお父さんお母さん	價一・〇〇	送一・四
池田 小菊氏著	父母としての教室生活	價二・三〇	送一・八
大谷 恒郎氏著	先生から知らした生きた教育會話	價一・八〇	送一・四



號四第 育教の兒幼 卷四十三第

—(次 目)—

口繪

卷頭(この萌芽に對して).....	倉橋惣三(一)
幼兒教育上に於ける繪畫の領域.....	和田實(二)
幼兒の教育と一錢玩具の話.....	松前福廣(八)
幼童教育と童謡(二).....	葛原 齒(六)
幼少年の口腔衛生.....	湯淺泰仁(三)
幼兒の服裝について(四).....	成田 順(三)
街で拾つた噺.....	水谷年恵子(元)
スタンプウォーク.....	山形 寛(四)
童鳩ちゃん.....	高島 巖(咒)
土いじりの二二三(二).....	大岩 金(五)
童何故さう物語.....	中野好夫譯(六)
そのひごらき.....	S・K 生(充)
讀者より	

始めて幼兒の友となりて

武藏野音樂學校長 福井直秋先生著

(好評三版)

# 兒童唱歌七十二曲集

菊版洋裝美本

箱入全一冊

定價金壹圓貳拾錢

送料金八錢

兒童唱歌の基準!! 待望の名曲集漸く成る。

俄然大殺好評!  
注文殺到好評!

こつきわかくさ・ささぶね・みいちやん・ぶらんこ・たんぼぼ・シヤボンだま・あをがへる・ひよこ・さよなら・つばき・さくら・日の出・すずめのおやど・子ねこ・まりなげ・はしれ・國の祝日・ねむれ・青空・野ぎく・朝濱邊あるき・つつじ・山路・ねむりませう・月・兵隊さん・風車・ご門の電燈・みなしご・冬が来た・氷すべり・蝶々・川遊び・朝風・鯉のぼり・雲雀・池の緋鯉・登山・子雀・星のひかり・山家のちいさん・月のひかり・霧・雪・春景色・田舎道・琵琶湖・夏の間・盆踊・涼しき森・汽車の旅・残れる秋草・小さき星・落葉・郊外の秋・港のにぎはひ・懐しの友・冬枯・花見・春風・小舟よ・あやめ・松風・懐し我が母・川邊の柳・うれしや我は・清き小川・冬の夜・親の恩

好重  
評版

新尋常小學唱歌伴奏解説

全六冊  
定價各六拾錢  
送料六錢

子供の舞踊

卷一・二 低學年用 各金六〇〇  
卷三・四 高學年用 各金一〇〇〇

福井小學唱歌教材の選擇に就て

全一冊  
定價四十五錢

エホンシヤウカ春・夏・秋・冬の卷

定價各金三五錢  
送料二錢

振替電話 東京 東田 〇八三三  
〇七三三

音樂教育書出版協會

東京市神田區 二丁一ノ

サ                          サ  
ク                          イ  
ラ                          タ  
ガ                          タ

附  
屬  
幼  
稚  
園



# 幼 兒 の 教 育

昭 和 九 年 四 月

## この萌芽に對して

新らしい萌芽を見ることは楽しい。また、その伸びてゆく力を思ふことは嬉しい。しかし、その柔かき弱さを前にして怖ろしさなしにはゐられない。識らずして踏みにじりはしないか、誤つて手折りはしないか、壓へて歪めはしないか、氣づかふては胸のおのゝくを禁じ得ない。

自發みや、生長みや、自然の力みや、それはむかふのこころである。こちらとして、は、はらくみする怖ろしさのみが残る。むかふの力に任せて、こちらの心づかひを忘れるのは、鈍感か、怠慢か、粗野か、横暴かに外ならない。

可憐なる幼児達に見るこの萌芽に對して、怖れ戦く心、そのこまやかさに幼児教育者の良心がある。



# 幼児教育上に於ける繪畫の領域

目白幼稚園  
保姆養成所

和田實

一、口に子供の繪云つても、之には三つの意味を持つて居る。一つは子供を畫材としたもので、繪畫としては普通の繪と同じ意味のもの、一つは子供に見せることを目的として畫かれたもので、其畫材は多方面に亘つて、子供の興味の對象となるものを描いたもの、今一つは、子供自身に描いたもので、子供の發表としての繪である。即ち子供の繪云ふものは

一、子供を畫材とした普通の繪

二、子供に見せる爲めの繪

三、子供自身の發表畫

の三種類なるものである。それで、繪畫が幼児教育上に何んな役目を持つかを調べ様にするには、自然此三種の繪畫が幼児教育上に何んな働きをして居るか云ふことを研究することになる。

幼児教育上に於て、繪畫が最初に役立つのは、幼児二三歳の頃に於ける直觀材料としての役目である。此時代に於ける幼兒の遊戯は、主として、事物を直觀することに興味を持ち、空虚な精神界に、事物の在ゆる印象を蓄積することを目的とした働きが、其生活の大部分を占める。此働きに因つて、子供は精神活動の材料たる數多の觀念を蓄積することが出來、思想界を形成する細胞を收穫することが出來るのである。従つて、此時代に要する所の子供の爲めの繪畫としては、子供

の直觀的興味の對象たるものでなければならぬ。即ち、前記三種の子供繪の中の第二種に屬するもので、且つ主として子供の直觀的興味を満喫させることの出来る種類のものを主として要求される。従つて、子供に見せる爲めの繪としての最初の條件は

第一に直觀材料として興味あるもの即ち子供の生活材料たるもの

第二に直觀材料として役立つもの即ち忠實に寫生したるもの

と云ふ二つの性質を具備して居ることが必要な條件となると共に

第三の條件として其繪畫の表現法即ち書表はし方が陰影の強い單純なもの程、子供には判り易い。時には背景なき、全然ない位の單純なものが喜ばれる。此三つの條件を具備したものが、幼児教育上最初に役立つところの子供繪である。而して此様な要求に適ふところの繪は、主として子供の爲めに描かれることに因つて、其要求を満たされて居る。市中に於て到る處の書店に賣られて居る、小は二三錢から五錢十錢位の謂ゆる赤本と云ふものから四五十錢の子供用の繪本が皆此要求に對して、供給されて居る。併し、前記の第一種に屬する普通の繪の中及其他一般の普通の繪畫の中にも、子供の直觀材料となるものは随分ある筈である。唯、其分量は甚だ少ないであらうから、一般の繪畫中から、子供の爲めに選び出す以外何うして、子供の爲めに作つて遣る必要が起つて來る。殊に、幼児教育の時代に適當な繪、即ち幼児の幼稚な直觀力に適した繪と云ふものは、一般の普通畫の中には殆んど無い。故に、子供の爲めの繪と云ふものは何うしても特殊の目的の下に、作爲される必要がある。

子供が段々發達して、複雑した繪畫の内容を理解する様になれば一般の繪畫が、子供にも理解される様になるから、特に子供のために作爲されなくても、一般の繪畫中から、必要に應じたものを、直觀材料として選ぶことが出来る。幼児が

六七歳になるに、可なり繪に對して理解を持つ様になる。そして、初めは單に、物を理解し、次に物の運動を理解して居るに過ぎない直觀力は、此時代になるに、繪畫に表はれる感情や意味をも理解することが出来る様になつて、繪畫を見る興味は一層高尚になる。殊に、鑑賞的に繪を見ることの出来る様になることは、直觀作用の大なる發達を云はねばならぬ。然も、其鑑賞力は始めは、事物の形式美を認識するに過ぎないが、次第に夫れは精神美を認識するのに向つて發達して来る。斯うなるに、子供に見せる繪だから云つて、決して、馬鹿に出来ない。夫れこそ、古來名畫の中から適當のものを、子供の爲めに選擇して、直觀材料としなければならぬことになる。斯くして、子供の鑑賞力は適當の指導者によつて、何處迄も發達して行くことが出来ることになる。要するに、繪畫は、先づ外界の事物を理解する爲めの直觀材料として、子供に與へらる可きものとなり、之が次第に高尚な社會や自然を理解するに役立つ、更に進んで、文化の理想を理解し鑑賞するに適當の様に役立つものである。

斯様に繪畫を云ふものは、子供に、心の糧を供給するに云ふ役目を最初に持つて居るものであるが、次には、子供の發表機關として更に大きな役目を持つものである。併し、此發表機關としての繪は、前記の直觀材料としての繪は最初は何等の關係をも持つて居ない。直觀の上に於ける子供の繪の認識は隨分、早くから發達するもので、材料が適當ならば一年位から、悅んで見るものであるが、發表としての繪は、容易に發達しない。また、其發達も、認識的發達は割合に、速かに、幾多の段階を進んで行つて、幼児教育の終り頃には、可なり高尚な理解も鑑賞も出来る様になるものであるが、發表としては、技工の發達が容易でない爲めに、其發達は極めて、遅々として居る。

此二つの方面の發達の差異は隨分、大きな隔りのあるもので、認識方面では、繪の美醜から技工の巧拙迄も、相當に批判出来る眼はありながら、手の技工は、極めて、幼稚で話にならぬに云ふのが、今日普通の子供、殊に、都會地に於ける

幼児の状態である。時には之が爲めに、子供は自分の發表畫の拙劣なのを自覺して、却つて描畫を嫌ふ云ふ様な、不幸な破目に陥るゝことがある。是は幼児教育上、由々しき不幸事である。故に、幼児教育の上からは、此兩者の發達を、成る可く無關係にして、子供は繪の認識や鑑賞は、別個に、自分の描畫を樂しむ様に仕向けなければならぬ。併し、此兩者の關係は、全然、無關係に終るゝことは、決して出来ない。何となれば子供の外界を認識する結果が發表されるのであるから、發表し來るゝところの内容は、悉く認識と關係して居るからである。従つて、子供の發表には、拙劣な技工を以て、比較的高尚な認識内容を盛つたものが、澤山ある譯である。然して、是が多く専門畫家をして驚嘆せしめるゝところのある所以である。子供禮讚家は之を以て、子供の神性に基くものゝして讚美して居る。子供は無邪氣である。純真である。神性に満ちて居る。此偽りなき純真な眼で、物を見るから、事物の真相を單適に、觀取するゝことが出來、大人の苦心して探し求むるものを、苦もなく認識して、發表するのである云ふ。全く然うも云へるでせう。併し、心理的に子供の心を解剖すれば、前述する通り、幼児教育上に於ける直觀的誘導方法の好結果に基くもので、別段神祕的なものではないのであります。兎に角、斯う云ふ様な關係にあるものでありますから、繪畫上に於ける幼児教育第二段の任務としては、幼児の描畫力を適當に誘導して、幼児の思想感情を、自由に、大膽に卒直に發表するゝことの出來るゝところの技巧を、成る可く速に得させるゝ云ふゝことが必要になります。但、扱て之が大變な困難な問題で、吾々幼児教育者の大に苦心する所のものであります。從來、保育上に於ける畫き方云ふものは唯其技工を收得させるだけのものであるやうに考へられて居りましたが、決して、そんな單純なものではありません。畫き方も、他の凡ての保育事項と共に、深い根柢のある人間の發表機關で、非常に大切な保育事項であります。尤も、是れは畫き方を、偉れた認識の發表機關として考へる時の意味で云ふので、若し、其認識が平凡で、卑俗で、然したる文化的價值のないものであつたら、其發表機關としては自然、大した値打

ちは無いことになりましたが、吾々は専門畫家が、子供の發表畫の偉大な價値に驚嘆する様な場合を、主として考へて、其根柢たる繪畫の直觀的誘導を大切に考へることに、其發表としての畫き方を大切にしたいと思ふのであります。

所で、何うすれば子供の描畫能力、即ち技工を發達させることが出来るか、是に就いて、從來の保育法が教ゆるところの方法は現在、最も多く行はれて居るものは、

### 一、自由畫の獎勵

二、塗り繪、透き寫し、輪廓等の技工習作であります。

右の二つの方法は無論よい方法であります。併し、是だけで、充分でせうか、此外に、何か方法はありますまいか、嘗て、檜崎博士と上坂畫伯は其共著「子供の繪の見方と導き方」に於て「畫心」の養成の必要なことを提唱されましたが至極結構なことと思ひましたが、併し、其畫心の養成法に就ては、詳しい指導がありませんでした。

所謂「畫心」と云ふものは二つの方面に分けて考へなければなりません。一つは繪の認識方面であり、一つは畫かんとする興味であります。共に現在の圖畫教育上の缺陷であります。繪の認識方面は直觀や觀察の指導方面の任務であります。繪畫を直觀材料として使用するに共に、一般直觀の指導に因つて此目的を達することが出来ますが、畫かんとする興味を誘導することは如何なる方法に因る可きでせうか、是が從來の二つの方法に缺けて居る所であります。そして、是が保育の一つの目的であることを從來の保育者は氣が付かないのです。實に保育事項としての畫き方は技工其ものゝ進歩發達を計ることに、幼兒をして描かんとすることに興味を發揚せしむることに、最後の目的でなければならぬのであります。此興味は、單に、自由畫を獎勵したり塗り繪を行らせるだけで、發達するものではありません。此興味を誘導する唯一の方法は何か。夫れは描畫其ものゝ觀察であります。畫を描くところを觀察させることでもあります。是が私の主張するところの動物觀察

の一つの特徴であります。子供は人の描くところを見ることに因つて、描かんところの興味をそゝられるのであります。他人が巧みに書きつゝあるのを見るに、自分も仕度い氣持になるのであります。畫きたい氣持になればなる程、眼を皿の様にして、描く人の描畫振を見て居ます。そして、其描畫の仕方を見て居ます。其中に描畫興味が發揚するに、模倣興味も手傳つて、畫をかく眞似を始めます、そして、眞似して描く様になります。斯ることを度々經驗すればする程、益々畫を描くことの興味は増大します。そして、益々描畫の經驗を増すと共に、其模倣力も發達し、技工も發達して、愈々益々其興味を増大する様になつて來ます。勿論、此の間にも絶えず、先生や先輩やの巧みな描畫振を見させねばなりません。要するに、畫に巧みな人の描畫振を見せ付けられることは、描畫興味發達の唯一の門戸であります。故に、子供の要求に應じて子供の見て居る所で畫を描いて見せるに云ふことが、子供の畫かんとする興味を描畫方法の模倣力を誘導する唯一の方法であります。斯様にして、子供の描畫興味を導きつゝ、自由畫、指導畫の習作を獎勵するならば幼児の發表畫の發達は相當の域に達するものと思ふのであります。尙其細かい順序方法に就いては、私にもまだ研究がありませんので、確かな詳しいことは茲に述べられませんが是はまたの機械迄御猶豫を願ふことにして置ませう。

兎に角、以上述べた通りで、幼児教育上に於ける繪畫を云ふものは一つは直觀材料として子供の心の糧を供給する方面に役立ち、一つは發表機關として大に習練を積ませねばならぬ方面の二つの領域を持つて居るものであります。

# 幼児の教育と一錢玩具の話

松 前 福 廣

八

○  
安い玩具に就いて何か書けよ云ふ御命令を受取つてから、ペンを取つてみるにさうもあちらこちらに支障が出来て少しも書けなくなつてしまひました。それでお許しが出るかさうかわかりませんが、思ふだけのことを書かしていただくかうに勝手に定めて書き出すのですが、さの位皆様の御参考になるか案じて居ります。

## 二つの「たとへ」話

トルストイは斯う云つた様なことを云つて居ります。目を持たない國の人達の中へ一頭の象を連れて行つて、象は何ぞやと質問したそうです。その時その中の一人は象は細長い様なものだ云つたそうです。又一人は象は太い管の様なもので決して細い繩の様なものではないと云つたそうです。又他のものは薄いものだ云ひ、廣い壁の様

なものだ云ひ、太い大木の様なものだ云つたさうです。

これは象の尾であり、鼻であり、耳であり、腹部であり、足であつたのでありまして、象全體をまきめて見たものではなかつたのでした。斯うした局部的の見方それ自體が、我々の視野を狭くし、明白なものを不明なものとし易いのではないでせうか。

又矢張トルストイの言ですが、粉屋がよい粉を作るには先づ第一によい水車の事を研究しなければならぬと考へました。それから又よい水車をつくるには動力である水のことを研究しなければならぬと思つたのです。それからその水も遠くから流れてこなければならぬし、水を流すには溝をつくり、土堤を作らなければならぬから云つて土堤の研究をしたさうです。そこで「よいこな」をつくるに云ふ目的は縁もゆかりもない命題が、研究の對象に置

き換へられたさうです。

さてそこで私達が日常幼児の世界の中で働いてゐる時に、斯うした二つの例に遭遇するやうな場合が数多くありませんでせうか。男の子が喧嘩をした。石をぶつけた。棒切れで打つた云ふやうな日常の一つ一つの現象を見て如何解決をつけられるでせう。細い縄だ云ひ、太い管だ云考へ、大木だ云思つて象そのもの、本體をつかまないのでせうか。まふこまはないでせうか。

### 進化して来た我々と我々の成長

私の玩具を申上げる前に私達が知つてゐるこまでありながら、つい忘れ勝ちである事實から申さしていただきます。即ち「よいこま」をつくるこま云ふこまを忘れて土堤や水の研究に落ちぬために。

我々が少くもダウイン以來下等の生物から進化して来た高等の生物である云ふこまはよく知られてゐるこまですが、それでゐる忘れられ勝の事柄です。だんく進化發達して来て現在の人間私達迄に進化してきたのだし、これからも進化して行くのだ云ふ事を忘れてしまつて、現在

の人間即ち「我々」が「我々」の世界を作つてゐるのだ云ふ事のみ、先入觀念にさらはれてゐる過ぎるこま云ふ事です。又我々の存在が進化論やメンデルリズム等の證明する様に進化したものだ云ふ常識を持たれて居られても、日々の我々の直面する現象を結びつけてお考へになる方は少いのではないかと思ひます。殊に十ヶ月の妊娠期間の生長経路が、過去何萬年に經過した進歩の過程を通過して來てゐるのだ云ふ事は忘れられ勝ちの事様です。我々の發生が卵である單細胞の生活に始まつて、細胞分裂に出立し、その誕生にまで至る經過が過去の進化を辿るにすれば、誕生してからの發育生育の状態に於ても過去を全く切り離された別のものだまは考へられない筈です。即ち誕生してから一日の生長の中にも過去の力はこの生長を支配してゐる云つてよいので有ります。例へば哺乳類中で猿類が他の動物より進化した云ふのは、たゞ「手」の進化による事だ云はれてゐます。「手」の進化即ち、前肢でものを「握る」事が出来る様になつた云ふこまです。このこまは敵を倒し、敵から自分を守るに役立ち、如何に進化の過程を進め



たかみ云ふこゝになるのです。

## 乳幼児の生活と原人の生活

ミスの様に考へた時に、我々の嬰兒がミスの様な状態で生れ、發育してゐるかを考へてみませう。先づ第一に手を握り、後肢を動かす本態的運動を持つて生れて來ます。それから手の運動ミ口に物を運ぶ本態的欲求によつて、種々の體驗を得る事物に對する判斷力を増加し、種々の智力を養成して行きます。例へば赤ちやんが持たされたおもちゃを偶然「落した」こゝから自分が意識して「落す」こゝ云ふこゝを憶へ、それから「投げる」こゝを憶える様になるこゝはよく御覽になるこゝでせう。さあそれミ我々の先祖ミが如何關係があるかミ云ふこゝも申す迄もないこゝでせう。

皆様の園児はきつミお椅子で、お机でお家を作るでせう。皆様の園児は吐つてもく土いぢりを土いぢりをなさるでせう。立派なお砂場があつてもよそから土泥を持ちこんでくるでせう。男の兒も女の子も花を見れば取つて來て、用もないのにむしやくつてしまふ場合が多いでせう。トンボを見ればきつミミらうミ努力するでせう。そうして殺して

しまふでせう。喧嘩をしてはいけなさいくらゐ止めても喧嘩はやみませう。窓の上に登つたり、柱に登りたいミ努力するでせう。女の兒は人形を好むでせう。人形がなければお蒲團を人形の代りに可愛がるでせう。時にはミセラブルのコゼットの様に劍でも箆でもが人形の代りをするでせう。これらの一切は吐つても如何しても止ぎめきれない現象の種々相です。きつミこれらの事實の連鎖が幼稚園や託兒所の一日くの大部分を占めてゐる事ミ思ひます。「あゝ何々さん石を投げてはいけません」「あゝそれそんなに土や砂をまき散らしてはいけません」「窓にあがつて落ちるミ痛くなつて困りますよ」「それお椅子がこはれるではありませんか」ミ云つた様に。

然しそれは毎日く繰返されたるこゝであり乍ら、如何しても止められない毎日の事件です。何故これらの事々々が先生方の頭痛の種であり、毎日く吐つても吐つても止められないでいつもく幼児の世界を支配するのでせう。よく先生方やお母様方は斯うした言葉を仰云ひます。無意識に、「ほんさうに子供のしたいこゝをさしてやりたい

「ご思ひます」。こゝ然し無理解の自由程恐しいものはないに  
申添へたいと思ひます。子供達の欲求するものは何のため  
に。何故それがあるか云ふ真底を考へない場合は極めて  
危険です。即ち生長しつゝある乳幼児の頭腦や身體は我々  
大人が持つ頭腦や身體とは大小の相違でなく内容形態の上  
から異つて、進化の過程にあつた前人の形態を想像される  
のであります。従つてその時々には現はれてくる止むに止ま  
れぬ本能的衝動は過去の力にあるのだと申しても過言では  
ないのであります。丁度進化の過程にある、即ち發育しつ  
つある我々の嬰兒や幼児の上に心理的に又肉體的の運動を  
して現はれてくるのも當然な事であるのであります。少く  
も現在の人間は過去に於て勝れたものが適者生存の結果  
を遺した血——遺傳の集結でありますから、現在のこ  
の我々の血は當然過去に約束つけられてゐるに云つてよい  
のであります。

### 然らばその生活をどうするか

それですから子供達が喧嘩をするか、其他の行動はた  
だ無意味に否定さるべきものではなく、寧ろ場合に於ては

獎勵さるべき事實であるのであります。何故と申しまして  
過去に於てそれが勝れてゐたために勝者であつたものが現  
在の我々をもたらしたのでありますから、將來をよく導く  
上にも必ずその必要さがあるのであります。將來のために  
よりよくその天分を指導する必要があるのであります。

然しそれがよいのであるから云つて喧嘩をしなさい。  
棒で打ちなさい。石を投げなさいでは其處に教育云ふも  
のになつてしまふのであります。如何にして子供達の  
求むるものを與へ、子供達の心を引延すか云ふことが大  
事になるのであります。其處に教育の重大性があるわけ  
であります。教育は現在日々のためにされるばかりでな  
く、人間一生に何を與へるか云ふことにあるのでありま  
すから近視眼的努力はお互に避けなければなりません。が  
さて子供が「打つ」云ふ興味、「争ふ」云ふ興味、即ち闘  
技欲云はれる行動も狩獵心理云はれることによる行動  
も、其他の本能的行動も、たゞ現實の問題として否定す  
べきだから禁止する云ふ様な方法が實際問題として行は  
れ易いのであります。例へば椅子や机でおうちをつくる子

供達に、椅子や机が壊れるからいけないと云つて禁止する代りに、何故に丸太や木片を與へないのでせうか。金鋸で釘を打つてもかまはぬやうな大きな板や角材や丸太を與へないのでせうか。一組二百圓だ三百圓だとか云ふ何式の積木

と云つたものも勿論結構には違ひないことですが、併しこんなに充分に經費をかけられてゐる幼児もおそらく木を切る樂しみも釘を打つ樂しみも味へないでせう。それにはかかる積木の他に丸太でも角材でも板でもを充分に具へる事がよりよいことではありますまいか。又方形を要するときは蜜柑や林檎の空箱を澤山に與へても立派な積木として子供達を樂しませることが出来ます。そしてこれらの空箱はやがてメチャ／＼に壞されて子供に破壊欲を充分満足させ得て期かに喜ばせることが出来ます。方々の幼稚園や託兒所でのジングルゲームがひきり淋しさうにポツチンとしてゐるのを見ます。あれはよい運動具に違ひない。子供達の悦ぶ多分の分子を持つてゐるのに何故鈴なりになる程利用されないのか。餘りに先生方の御注意が行き届き過ぎるのミ、家庭や幼稚園が子供を臆病に育て過ぎたのではな

いでせうか。子供自身が持つてゐる本能的な大事な芽を萎縮させてしまつた結果であること云つてよいのではないでせうか。

大分餘論に涉りましたが元へ戻つて、そんなら本能的に現はれて来る種々な現象を如何云ふ風に整理するかと云ふ事になる前に申しました椅子や机の場合と同様に、その弊害を除去したものを與へること云ふ事が必要になります。石を投げる子にはまりなげを、喧嘩好の子にはお角力やふざけっこ。窓や柱に登る子供にはおすべりや木登やジングルゲームを。メンコをして困る子供にはふざけっこや軍艦遊戯を。

何故私は前述の例を擧げたのでせう。空腹を抱へてお菓子をはしがつてゐる子供達に玩具を與へても、それは子供達に満足を與へるものではありません。空腹と云ふ現實に對しては御飯を與へるかお菓子を與へるか、にあるのであります。又渴してゐるものにバンや菓子と與へるのも愚な話でせう。其處です。身體の内に活力が旺盛になつて、喧嘩をしたり走り廻つてゐなければならぬ衝動にかられてゐる

る子供達に静かな仕事に従事しなさい云つた處でそれは

飢えてゐるものに玩具を與へ、渴してゐるものにパン菓子  
を與へるのに等しい愚の骨頂に過ぎないのであります。そ

うしてその子は先生の云ふ事を聞かない子供、親の云ひつ  
けの守れない子供だ云ふのでは、あまりに子供が可愛想

な場合が出来ます。斯うした場合にはこの旺盛な衝動を満  
足さしてから静な仕事をさせてこそ満足な結果を得るので

す。又我々の場合でも今日は幼稚園や託児所から定つた時  
間に歸つて映畫を見に行かふとお腹の中で考へてゐる時、

園長さんに今晚は少し用事が出来ましたから残つてこゝを  
整理して下さい云はれたら、子供でなくても一寸「ハイ」

と心よく承知出来るものではありません。然し園長さんが  
氣の毒だが今日は残つて母の會の方々を音樂會に行つて

くれませんか云はれた場合、映畫を音樂會よりは少し傾向  
が違ひますが、先づ先刻とは違つて心よく引受けられるで

せう。その氣持、心理を子供に應用すればよいのです。子  
供の欲求の原因さへ見透し出来れば、それと同様の結果に

なるものを備へることが出来、子供は満足するものであり

ます。

即ち子供ご自分の欲求する種々相を自分の狭い生活範圍  
で低度の智識にあてはめて考へ、遊びに致しますから、

その生活環境によつては善意に行はれる「遊び」も決して  
よい遊びだとは云へない場合を生じて來ます。ですからそ

の生活範圍を智力の範圍を如何に指導し、育てるかによつ  
て教室教育より幾倍の効果も擧げ得るのであります。繰返

して申しますが象の足や尾をふりまはして「これが象だ」  
云つたり、よい粉を作るのに水の研究にまで進まれない様

に象總體を見て子供に接して下さい。

一錢玩具に就いてそれから玩具に就いて述べさせていた  
できます。私が玩具に就いて研究を始めたのも次の様な問

題から起つたのであります。

即ち私の子供時代も、心おぼえに記憶してゐる兄達の子  
供時代にも、また現在自分が大人になつてしまつてからも、

あこから來る子供もあこから來る子供も、その繰返して行  
くこゝ遊びの過程が同様だ云ふ事に疑問を持つたからで

であり云つた様な玩具がどんな迫害に會つても止め切れないで賣られ、又遊ばれてゐる云ふ事實ミ、それらの玩具に何の進歩の跡も認められない云ふ事實からであります。それは何故か云ふことが私の心を笞打つたのであります。

幼い時の事を想ひ出します。又男の子であつたならキツト一度や二度その體驗をお持ちの事だと思ひます。それは一生懸命ベイゴマやメンコをやつて大いに勝つて大よろこびで家に歸つて來るミ、お母さんやお父さんに發見され、お前はメンコをしてゐるのかミ叱られて、大事のくメンコを焼けてしまつたり、捨てられてしまつた事を。それからそつミメンコやベイゴマをしても發見されない様に縁の下にかくしておいたり、穴を掘つて埋めておいて知らぬ顔して家に歸つてゐたりした事を。それ程力強く私共を引きつけた玩具に就いて私も考へずにはゐられなかつたのです。それで先づ私も子供達はどんな玩具を欲求するかを調べて見様、それからどんな風にして遊ぶかを調べて見様と思ひついたのです。

それから先づ子供の欲求は子供の幼小遣で買へる玩具ミ云ふ事を題目にして集めました。

その結果を大きく分類してみますミ

一、ギャンプリングに類するもの

例へばメンコ、ベイ、ムキ、シホリ、ペーパー等

二、前項ミ其他の使用法を兼ねたもの

石けり、ラムチダマ、オハジキ等

三、ゲームもの

軍人將棋 軍人合せ 動物合せ 家族合せ

四、ゲームミ運動を兼ねたもの

紐類 ヒモ ゴム紐類 石ケリ等

五、本能的欲求ミ時代色ミを併合したもの

刀、劍、鐵砲、其他爆彈、ピストル等

六、おもむき道具

七、お人形遊び

お人形及び切ぬき、千代紙

八、裝飾具

指輪、髮飾、頸輪、香水、金齒、目鏡、ツケビケ、名刺

九、生活環境からの模倣を主としたもの

銀行ごつこの道具、郵便ごつこの道具、學校ごつこ及び

文房具

十、音響を主としたもの

十一、動くこみに興味を感じるもの

以上大體十一種の大分類がある云つてよいのであります。勿論この外に是等に屬さない小さなものゝあるのは勿論ですが、これも先づ問題外として以上の分類に就いて述べて行きませう。

### ギャンブリング類

先づ第一のギャンブリングに屬するものから申して参りませう。これは勿論説明するまでもなく、メンコだまかしほりだまかベイだまか云ふものは昨日今日に作られた玩具ではなく、少くも何百年から何十年の歴史を持つてゐるものだま云つてよいので有ります。それ程幾多の人間の心の隅に巢喰つて居たおもちやであるこみに間違ひがなく、それが子供達に年々歳々使用されてゐたのに何故に玩具そのものに進化がなく、又すたりもしなかつたのかを申す

こ、玩具そのものゝ進化は「面形」を稱せられた土焼のものが紙製の「面子」になつた外「鉛面」が出来ても問題にならなかつたのであります。

又しほりは專賣前の煙草の競争時代に煙草の箱の中に入られたカードに出立してゐる様であります。この場合のこのゲームはシタバリを申した筈です。煙草の專賣と同時にこんごはメンコを云ふ悪い觀念をカモフラージュして學用品のしほり云ふ名目で商品化して發賣されたま云ふ事になる様に記憶してをります。

御承知の通り「メンコ」のゲーム方法には色々のゲーム法のある事は申す迄ありません。即ち形態としては餘り進歩しなかつたが子供は自分達の欲求に應じて、子供達の生活經驗からゲーム方法に變化を求めたのであります。

次にベイ獨樂を稱する鐵の小形の獨樂ですが、江戸時代からある處の獨樂で其の始めはベイを稱する貝に端を發してゐるのであります。之も形態としては些も進歩の跡を見出しませんが、ゲームの方法から申しますと前者同様幾多の種類を持ち、中には立派なトバク的方法さへあるものであ

ります。殊に昨年神奈川県下にあつた事實としての児童の殺人事件を起す程、児童達を犯的にするものであります。

大人が競馬やバクチに夢中になる様に、何故に子供達は狂的になる迄これらの三のゲームを好むに至るか云ふその原因に就いて究明して見ませう。この三種の玩具に通有性があるのであります。それは「敵を倒す」云ふこと、相手を征服して勝者となることで、これは精神的な闘技欲を見るのが當然であります。その證明としてはこの玩具が使用され流行して行く傾向を見るに明白になるのですが、この玩具の商品として賣行のよいのは季節としては冬、夏の兩期で共に日蔭、或は日當りのよい處とする傾向があるのです、この兩時期には運動によつて殊に闘技欲の満足が充たれない時であります。然し近時東京ではまた異つた傾向が生じてきました。それは交通の煩鎖その他の爲に子供達の運動を阻止する結果、子供達は自分の心の中に燃える焔をこのゲームに向けて、即ち精神的闘技欲によつて満足さうとすることが多くなつたのであります。それですから近頃の市内等では絶間のない云ふ程にも思へるので

あります。今申上げた様な心理によつて行はれるだけのゲームならば問題はないのであります。敵に勝つことは征服を意味し、征服は征服で相手を取つてしまふ云ふのになり、敵を取る事だけに止まるならば其處に問題が起つても少いのですが、二ヶ取、三ヶ取、天下取になつて一獲千金を目當にゲームを進めるに至つては、この第二義的發展によつて玩具そのものゝ根本が破壊されてしまふのであります。そうして「敵を倒す」が目的のゲームが、「相手の所有を取り上げる」事が主になつてしまつてはこのゲームを非難しないわけには参りません。然しこの二つの重大な心理、即ち第一義的な闘技欲と第二義的な蒐集欲との變形的結合は根強さを持つて子供達の中に食入るのです。何故に申しますならば、前述の通りの本能的欲求であるからに申すより外はありません。この二つの欲求は人類の進化に功獻しました。併しこの二つの心理の私生兒的結合に對して迄、我々は効果があつたことは申されません。そこでこの二つの心理を分離して考へなければなりません。ですからこの二つを分けるに就いてはこのゲームの根本をなす第一義の欲求を

先づ取上げて指導し、第二義的要求は之を變形して與へるこゝによつて弊害を少くするこゝが出来るのであります。即ちこの玩具の生命も云ふ敵を征服するこゝ云ふこゝに就いては、ゲームの約束として子供達の世界にあるものゝままでよいのですが、第二義的欲求の、勝つたら相手のメンコを取つてしまふこゝに問題を生じてくるのですから、この「取る」こゝを約束の代りに譽心を置きかへて、「征服」に對しての代償として與へたならば十分目的を達し得られるのであります。即ち番附をつくつて横綱だとか大關だとか云ふのも一方法でせうし、又トーナメントの形で誰が選手だとか云つてもよいでせう。又現代の野球熱を利用して早稻田だとか、慶應だとか云つてもよいでせう。この様にして玩具から子供の欲求するものは何か云ふこゝも分析してよりよい指導を與へるこゝが必要であるのですが、唯單にメンコやペイのゲームの結果である品物のやり取りにのみ神經質になつて、そのゲームの本質を忘却して禁止するこゝ云ふのはよく見られる圖であります。この様な場合には私達の幼時の想出で申上げた様な結果となり、禁止し

ても禁止し切れない結果となります。又若しかうしたゲームさへ好ましくないから全然止さしてはうも考へるならば、闘技欲の變形、即ち精神的闘技欲の代りに肉體的闘技欲を與へれば、このゲームを中止させ得るのであります。

#### ペーパー

之はマッチのペーパーやレットルの蒐集が大人の世界で流行し始めるこゝ必ず玩具として賣られ出すのですが、子供は之を蒐集欲の對象としてこれを見るのでなくて、ギャンブリングの對象として之を取扱ふのであります。即ち積み重ねておいて息でふきかへして取るこゝか、手を合せてその時の風でペーパーを裏返して取るこゝの方法を用ひるのであります。之になるこゝ「取る」こゝが主になつてきて、敵を征服するために競争するこゝ云ふ行動はなくなつて來るのであります。斯うした大部分を偶然において射幸心をそゝる様なものになるこゝ、一言にして禁止して下さいと申すより外はなくなるのであります。それにこの場合のペーパーならば遊びの世界では低度のものでありますから、心配は少いのですが、次に申しますムキになるこゝ大問題になります。

(つゞく)



# 幼童教育と童謡 (3)

葛原 齒

## C、幼兒の心の整頓に役立つ童謡

童謡に、幼兒の心を混亂さすものがありはしないかを心配して、前講をなしましたが、しかし、あれも、緊張して、

第一節は何、第二節は何と、明確に覚えさす事が出来れば、苦はなくて、却つて、心を引き締めて、教育的だとも謂へませう。大理人か、大泥棒か、紙一重の差が原因となつて、方向を次第に變へた兩極端は、全然、相反するものになつてしまふのです、國と國との間も然り、人々との間も然り。全く、これは何だか、天地間の、人間界の、一つの約束事ではありませんか。

前々講の中の「覚え辛い童謡」も、前講の「幼兒の心を混亂さす憂のある童謡」も、これの導き方によつては、さうでなく、禍を轉じ福をなす事は出来ませんか。毒薬も時を方

に、童謡には、歌詞の他に、曲といふものが伴つてゐて、これを活殺自由によつてゐます。それだけ一概に論定する事は出来ません。

○

そこで、次の「鈴の音」にしても、

第一番は、母さまですよ、鐵についてゐる鈴ですよ

第二番は、小猫の鈴ですよ、猫の首輪についてゐる鈴

ですよ、その鈴が、いつ、チンチロロくく鳴るん  
でしたかね」

と問答して、

「私の振袖に、ぢやれつく度に、なるんです」。

正確かめておくべきです。しかし、現代の幼稚園や小學校の幼兒は、多く、洋服で、振袖は着ないのですから、「振袖」を改作しようと思つてゐる。長い袂を斷つて、元祿袖にす

る様に、チヨキンミ切つて何か、別の袖にする裁縫の道ほ  
ぎ、歌詞には外科のメスが振へないので困つてゐます。「元  
祿袖」や「筒袖」には、猫がぢやれついで呉れませんで！

鈴の音

梁田貞氏曲

一、チンチロロ、チンチロロ、

チロ〜、チロロ、チンチロロ、

赤いおべへを母さまが

おぬひになる時、チンチロロ、

鐵の鈴が、チンチロロ、

あれ面白い、チンチロロ、

二、チンチロロ、チンチロロ、

チロ〜、チロロ、チンチロロ、

小猫が私の振袖に

ぢやれつく度に、チンチロロ、

首輪の鈴が、チンチロロ、

あれ面白い、チンチロロ、

○ (「大正幼年唱歌」第十集)

次のは「子兎踊」ミもし、ビョン〜の類の擬態語を少し  
かへて、小松氏の曲のついたのが『昭和幼年唱歌』にもあり  
ますが、

母親兎の出て来るまで、

子兎ばかりで踊つてゐるミ、

影ミ一しよに

耳も はねる

こいふのは、全く同じです。

これは、全然、混亂のしようのないものです。そして、

幼児は、此の擬態語の面白さに引きつけられて、喜んで、

ビョン〜のちには、はね出します。

ビョンビョコリン

宮城道雄氏曲

ビョン ビョン ビョンビョコリン

ビョン ビョン ビョンビョコリン

母さん兎の出て来るまでは

子兎ばかりで一けいこ

ビョン ビョン ビョンビョコリン

ビョン ビョン ビョンビョコリン

ビョコリン ビョコリン

ビョコ ビョコリン

ビョン ビョン ビョンビョコリン

ビョン ビョン ビョンビョコリン

踊る皆の小さな影ミ

一しよにはねてる長い耳

ビョン ビョン ビョン

ビョン ビョン ビョン

ビョコリン ビョコリン

ビョコ ビョコリン

(「箏曲童謡」第五集)

○

次のは、

第一節が、お顔、であり

第二節が、お尻、であります。又、

お顔であるから、

怒つたのかと思はれ

酔つたのかと思はれるのです。又、

お尻であるから

尻餅かと思はれ

怪我した事かと思はれるのです。

お猿のお顔

宮城道雄氏曲

お猿のお顔は、赤いのさ

生れた時から、赤いのさ

怒つてゐるんぢやないんだよ

酔つばらつてゐるんでも、ないんだよ

お猿のお尻は赤いのさ

生れた時から、赤いのさ

尻餅ついたんぢやないんだよ

怪我してゐるんでもないんだよ

(「箏曲童謡」第七集)

しかし、これは、下品に聞えますので、私は、之を葬り

たく思つてゐます。しかも、可愛らしいお嬢さんが、上品

に美しいキモノで、お琴の前に、お行儀よく坐つて、

——お尻は 赤いのさ

尻餅ついたんぢやないんだよ

こ上手に、歌はれ、ば歌はれるだけ、近頃、私は、穴にも  
はいりたいさいふ氣持です。

○

すく／＼こ伸びるものは、竹の子であり、又、コドモで  
あります、幼児であります。竹の子の方は、只、その體だ  
けの事ですが、幼児の方は、それこそ、手足も心も、すく  
すくこ伸びます。遊んでる間に、寝てる間に、晝も、夜も、  
只、すく／＼こ——、

竹の子に「伸びろ」さいふ心は、我が子に、「伸びろ」さい  
ふ親心です。そして、「晝の風」が、父親の心ならば、「笹の  
露」は、母親の心です。そして、又、父は父らしく、正しく  
強く、

「お日様見上げて——」

さいひ、母は母らしく、優しく美しく、

「お星様見上げて——」

さいふ。この對照の正しさ、確かさは、動きません。そこ  
で、

「一番は、晝ひるでしたかね、晝ひるですから、何を見上げて、伸  
びるんびるんでしたかね」

「お日様、見上げて、です」

「よろしい。お日様でしたね。それから、一番は——」

「お星様見上げて、です」

「よろしい。お星様でしたね。そして、あのお星様は、  
晝ひるでしたかね、夜ひるでしたかね」

こ、若し問ひでもしよものなら、幼児達は、

「先生は、何をいつていらつしやるの」

こ怪しんで、異口同音に、

「お星様は、夜ひるですよ」

「先生、知らないんですか」

こさへまじめに笑つてくれるでせう。

「左様さよう々々。お星様は、夜ひるでしたね。

晝ひるは、お日様見上げて——

夜ひるは、お星様見上げて——

でしたね。

それから、おしまひの所は、ごちらが

簸の風さらら

で、そして、ごちらが、

笹の露 はらら

でしたかね」

と確めておかなくてはなりません、中にはこの擬態を取違

つて

簸の風 はらら

笹の露 さらら

といふものも出て来さうです。そこで、「さらら」「はらら」「

さらら」「はらら」の意味の相違の説明も、必要になりませう。

「皆さんも、竹の子に負けない様に、強く大きくなりませうね。」

「ニコニコさせて、不行儀と思はず、立上つて、両手を、

「さ、さ、お日様に届くまで」

と、うんと伸びますの、これに附随して、よい指導であ

りませう。

竹の子

一、伸びろ 竹の子

晝間も伸びろ

晝は お日様 見上げて

伸びろ 簸の風さらら

二、伸びろ 竹の子

夜の間も 伸びろ

夜は お星様 見上げて

伸びろ 笹の露はらら

（「筆曲童話」第四集）

○

「この幼稚園にも有るのは、又、有りたひのは、セルロイドのキューピーさんです。何と、いふ朗らかなキューピー

のすべてをせう。わけて、まるく、肥えた手足を頬つべ。

その眼のつぶらに、愛くるしいこころ。わけて、両手の指を、

パツパツ開いた氣持よさ。そこで

一番は、お目々で

二番は、指でしたね

さだけ、後は、何の不安もなく、すぐに、「キューピーさんく〜」です。

キューピーさん

弘田龍太郎氏曲

キューピーさん キューピーさん

何に そんなに 驚いて

大きなお目々を みんなばつさあけて、

白黒させて立つてるの

キューピーさん キューピーさん

何に そんなに 驚いて

五本の指を みんなばつさあけて

裸のまんまで立つてるの

(「幼年童話集」第一輯)

○  
日があたる

小松耕輔氏曲

日があたる 日があたる

上の窓あけるミ 上の方にあたる

下の窓あけるミ 下の方にあたる

日があたる 日があたる

日があたる 日があたる

大きい窓あけるミ 大きい日があたる

小さい窓あけるミ 小さい日があたる

日があたる 日があたる

(「けんく〜子雉」より)

自然界の現象の力、天體の不思議は、幼時から感じさせたいものです。さうして、太陽そのものゝ不思議さいふよりは、偉大さは 直接に理解出来なくても、その光線の現はす種々の不思議は、ほんみに、大した手品です 魔術です。太陽が昇つて、日があたるさいふのは、あたりまへの事で、何の不思議でもない様ですけれども、しかし、その光年かうねんを考へる事は出来なくても、その光度、また、その温度を、感じさせる事は出来なくても、真正直に、上の窓あけるミ 上に、下の窓あけるミ下に、又、大きき窓をあ

けるこ、大きい日がさし、小さい窓をあけるこ、小さい日がさすやうに まごきに、人間のするまゝに、現はれる太陽の光りの、素直さ、いえ、正しさ、それは、成人して後も、十分に味ははせたい大した事實です。その事實を信じ、それが、もし、正しい心でなかつたら、何さしませう。百の修身例話よりも、かうした事實を信じさせ、その嚴肅味さへ、おぼろにでも感じさせ得たらさ思ふのです。

さて、此の童謡は、一度きいたゞけで、

上の窓あけるこ

大きい日があたる

こいふものも無いでせうし

大きい窓あけるこ

上の方にあたる

こいふものも無いでせう、もし、有れば、それこそ、他の事を考へながら、唯、口先で皆について、歌つてゐるので、すから、その児童の放逸さへ、分るのでした。

○

滑稽味の少ないのが、殊に、従來のお琴や三味線の童謡

でした。一般の童謡にも、アハハ……オホ……こ笑はされるものが多いこは思はれません。此の時、私宮城氏の多年の共鳴は、さうぞ、唯、美しき、唯、上品に、このみ傾いてゐた箏曲界に、殊に、そのコードモ曲に、心から、ニッコリさせられ、解放された哄笑をさへ伴ふものを、狙つて、幾篇もの新作をものし得ました。大正七年の處女作「おさる」を初めこして、「チヨコレイト」「ワン／＼ニヤオ／＼」「町の物賣」また、次の「小僧さん」など、みな、所謂三曲演奏會で、又、家庭向のレコードとして、まごきに、よい役目を果してゐます。しかし、さうぞ、くすぐりや、じやす氣分に陥らない様にこは、作曲家と共に、常に心してゐるのです。そこで「小僧さん」も

第一番が炭屋の小僧さん

第二番が、米屋の小僧さん

である事を、豫め、しつかり記憶に喚起させておいて、演奏にかゝれば、何の苦もないのですが、それでも、うつかりするこ、

炭屋の小僧さんが、

「ついで、今日は

米屋でござい」

さいつて、米屋の小僧さんのが、

「大きな俵は炭俵」

になつたりしては、それこそ、くすぐりの大失敗になるこ

こは、いふまでもありません。

鼻黒鼻白小僧さん

宮城道雄氏曲

小僧さん

炭屋の鼻黒小僧さん

大きな俵は炭俵

ガツサリ ガツサリ ガツサリ

「へい今日は

炭屋でござい」

大人見たいな ねぢ鉢巻の半黒手拭汗ふけば頬つぺも半

黒目蓋黒

小僧さん

米屋の鼻白小僧さん大きな俵は米袋

ウントコ ウンく

ウントコサ

「へい、今日は

米屋でござい」

大人見たいな ねぢ鉢巻の半白手拭汗ふけば頬つぺも半

白目蓋白

（「箏曲童話」第九集）

○

以下數篇、各節を對照させて、よく似せて、しかも覺え易く作つた積であります。そして、各々、その動物の特異性を狙つて、動物の先生方からも、お小言を頂かない様にした積であります。唯、七面鳥と鸚鵡の怒つてゐるのか、ゐないのか、それは、分らなくて、唯、形に現はれた點だけを、さう解釋したに止まります。ミ白狀しますさ、やはり、お小言でせうかしら。

ペリカン

小松耕輔氏曲

一、大きな嘴 自慢でござる



重さうに見えても 軽々き

振り廻される嘴でござる

ペリカン 自慢の嘴でござる

うすもゝ色の嘴でござる

二、大きな袋が自慢でござる

無ささうに見えても かくれてゝ

直ぐにふくらむ袋で ござる

ペリカン 自慢の袋で ござる

きいろいゝ袋で ござる

(「昭和少年唱歌」第二集)

七面鳥

梁田貞氏曲

一、キヨロツくくく

キヨロツくくく クツくくク

赤い顔して 怒りまはる

七面鳥は をかしいな

翅をひろげて 怒りながら

キヨロツくくく

キヨロツくくく クツ、クツ、ク

一、キヨロツくくく

キヨロツくくく クツ、クツ、ク

青い顔して 逃げ出した

七面鳥は をかしいな

翅を すほめて にげていく

キヨロツくくく

キヨロツくくく、クツ、クツク

(「大正幼年唱歌」第六集)

あうむ

梁田貞氏曲

一、あうむが きげん のよい時は

人のまねして 口を利く

「お早う」、「お休み」、「いらつしやい」

「坊ちやま」嬢ちやま「左様なら」

まだ 此の他に、出たらめの

わけの分らぬ事もいふ

二、あうむが 怒つてゐる時は

時々 へんな聲出して

先の曲つたくちはしで

自分のお家の金網を

一生懸命かぢります

何を そんなに怒るのか

(「大正幼年唱歌」第四集)

梁田貞氏曲

ペンギン

一、よた〜 あんよが 短かいな

ペンギン あんよが 短かいな

あんよが お上手 ここまでお出で

二、ばた〜 つばさも短かいな

ペンギン あんよ も 短かいな

あんよがお上手 ここまでお出で

三、まあ〜 立派な燕尾服

ペンギン みんなで ちこ行くの

あんよがお上手 ここまでお出で

(「昭和幼年唱歌」第一集)

宮城道雄氏曲

首ふり鼻ふり

熊が首振る

鐵の格子の中で首振る

氣取つて振る振る

ブラ〜〜〜〜〜

あまり振るなよ ちぎれるぞ

お首がちぎれて すつこぶぞ

象が鼻振る

固いたゝきの上で鼻振る

氣取つて振る振る

ブラ〜〜〜〜〜

あまり振るなよ ちぎれるぞ

お鼻の孔がなくなるぞ

(「箏曲童謡」第三集)

小松耕輔氏曲

牛三馬

一、うの字のつくもの 牛三馬

牛は のそ〜 のつそのそ

馬は バカ〜 バッカバカ

牛はもう〜 馬ひん〜

二、うの字のつくもの 牛と馬

牛のしつぽは すゝるする

馬のしつぽは ばつさばさ

牛は もうく 馬ひんく

三、うの字のつくもの 牛と馬

牛は二本の角じまん

馬はたてがみ大じまん

牛は もうく 馬ひんく

〔昭和少年唱歌〕第二集

白 兎

弘田龍太郎氏曲  
宮城道雄氏曲

白 兎

あなたのお家は ぬくさうね

草のおふさん ふくらんで

お日が ボカく ぬくさうね

白 兎

日向ぼっこは ぬくさうね

白毛のおへべに くるまつて

何だか さつきから ねむさうね

〔ニコくペンくの歌〕より

犬と猫

小松耕輔氏曲

一、私は お家の犬ですよ

私がるないご悪者が

お家へはいつてまゐります

私は お家の忠義もの

ワン ワン 私は いつまでも

可愛がつて下さいな

二、私はお家の猫ですよ

私がるないご夜の闇に

鼠が出ます さわぎます

私はお家の忠義もの

ニャアく 何でも私を

可愛がつて下さいな

〔大正幼年唱歌〕第四集

せみ

梁田貞氏曲

一、お倉の向で ないてゐる

ミン〜 蟬がなくてゐる

大きな聲で ミイン ミン

小さな體で あんなこゑ

ミン〜 蟬がなくてゐる

ミン〜 蟬がなくてゐる

二、お庭の中でも ないてゐる

カナ〜 蟬がなくてゐる

大きな聲で カアナカナ

小さな體で あんなこゑ

カナ〜 蟬がなくてゐる

カナ〜 蟬がなくてゐる

(「大正幼年唱歌」第二集)

ミン〜 蟬がなくてゐる

梁田貞氏曲

一、ミン〜 蟬がなくてゐる

向の森でなくてゐる

大きな聲で よい聲で

一生懸命 ミーンミン

二、ミン〜 蟬が ないてゐる

夕日をあびた森の木で

涼しい聲で よい聲で

夏だ〜 ミーンミン

(「昭和幼年唱歌」第三集)

以上、凡て、第一節が何であつて、第二節が何であるか  
いふ事を、よく、豫め思ひ出させておくのです。そして、  
伴奏楽器で、一回弾いて、メロデーを聞かせて後、

「さア、一番、△△ですよ」

の要領で、はじめますよ、絶対に間違はないで、すら〜  
ミ歌ひ進められる筈です。

# 幼少年の口腔衛生

湯 淺 泰 仁

三〇

昔より「病は口より入る」を申せし如く、先づ健康を得んことをせば口腔の健康を處理して、之に保護を加へることが必要である。随つて齒牙の疾病を豫防し、その健康を増進せしめることは國民保健上から見て最も大切な事柄である。

口腔疾病は年齢により異なるもので、例へば一歳の小兒に於けるものと、十歳の子供に於けるものと是非常に違ひ、又同一の疾病でも、年齢により症状、經過、豫後が全く異なるものがある。即ち組織の發育の程度により病原に對する抵抗力、免疫力が異なる爲である。随つて强健な齒牙を得るには幼少年期より更に逆上つて胎兒期、哺乳期に於ける注意までも必要とされてゐる。

「胎兒期」母體と胎兒との關係は齒牙に大いに影響があるもので、不完全なる母體より生れる子供は多く不完全なる齒牙を生ずるものである。斯る障礙は全身病にも見らる

る所謂素因と申されるもので、理論上成功せしめても絶體的には申されぬが、或程度まで適確なものに信じ、又相當確實な症例が擧げられつゝある。齒牙の發生は胎生の二ヶ月頃より始まつて五、六ヶ月頃には石灰化が始まるものである故に乳齒を完全に發生させるには胎生期に於て注意を要するものである。其には榮養攝取が肝要で主として磷酸鹽、ビタミン、石灰鹽等が必要である。

「哺乳期」この頃は胎生期以上に母體に注意を要す、勿論榮養素の攝取が必要である。此期は乳齒と六歳臼齒の形成に非常に關係あるもので、其發育は授乳中の榮養の吸收如何によるもので最も注意を要するものである。即ち前述(磷酸鹽、ビタミン、石灰鹽)のものは勿論尙ほ鐵、含水炭素、脂肪、蛋白質等を適當に得て骨や齒牙の硬い組織の完全な發育を遂げしむべきである。然るに人工榮養例へば牛乳の如

きものには大切なホルモンを缺し、母體に比し一般に成分が多く、濃厚過ぎる爲めに消化困難を來すので非常な注意を要す。尙ほ此時期は固形物を取らぬため唾液量少く消化成分(ブチアリン)も随つて少い。故に食物(澱粉)の消化は困難なるために種々消化障碍を來すものである、之による不幸なる轉歸は却つて結核よりも多いと稱する人がある。

乳齒出齦(ハル)の時期

中切齒 五ヶ月——八ヶ月

側切齒 七——十

犬齒 十四——二十

第一乳白齒 十二——十六

第二乳白齒 二十一——三十二

「幼少年期」(園兒)此の頃は精神的に肉體に其發育上大切な時期で、一度疾病が起れば全身的に大關係を起すものである。然るに口腔は殊に種々なる障碍を起し易きため非常なる注意を要する理である。即ち口腔の器能はやゝ完備すれども歯牙の組織は未だ不完全なもので抵抗力が薄弱である、又種々惡習慣に傾き易いもので實に口腔衛生上重

大な時期である。永久齒の萌出も此頃より始まるもので種々複雑せる變化が生ずるものである。

乳齒が齦(ムシバ)に罹りそのまゝ放置すれば永久齒の出齦に障碍を來し、後日永久齒の排列不正を招來する恐れがある。

尙ほ齦蝕疼痛のため神経を刺戟なし、智覺の發育に大害を與ふるに至るものがある、のみならず咀嚼能力が減退し胃腸を害し、結果全身の抵抗が弱くなる、一方には口腔内不潔により種々の黴菌を生じ恐るべき疾病に犯され易くなる。

斯くてこの目的を完結せしめるには既に齦蝕に罹りし者は勿論、未だ侵されざるものでも各個人が口腔内を注意して清潔にする事が大切である。随つて幼少年方は保護者が家庭に於ても充分注意して常に良き習慣に導きて頂き度いと思ふ。

永久齒發生(出齦)の時期

第一大白齒 六歳——七歳

中切齒 六歳——八歳

側切齒 七——八

第一小白齒 九——十一

(四八頁(續))

# 幼児の服装について(4)

東京女子高等師範學校教授

成田順

前二、三月號には袖・衿・胸の原型の裁方について記しましたが、本號に於ては具體的にロンパースについて其のこしらへ方を申し上げます。

## ロンパース (Romper)

これは三四歳以下用のいたづら着として用ひます。上々續いて居て裾が兩脚に分れ、運動・動作に便利にこしらへたものであります。キモノスリーブ(身頃袖)袖續いて居るものにしても、別袖にしてもよろしい。又裾にゴムテープを入れて縮めても、口布をつけてもよいし、後明・前明・膝下明何れでも子供の服としてよいやうに考へるべきであります。

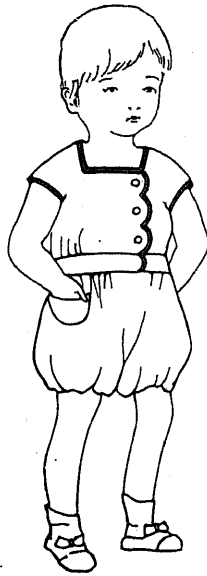
1、キモノスリーブで前及び跨明のもの

### 三歳用假定寸法

身長 八六センチ

胸圍 四八センチ

出來上り圖



### 1 型紙の裁方

1、丈 四三センチ(身長の凡そ $\frac{1}{2}$ )

2、衿ぐり、前後とも横に胸圍の $\frac{1}{10}$ を取る。前は縦に原型より二センチ下けて角型にくります。

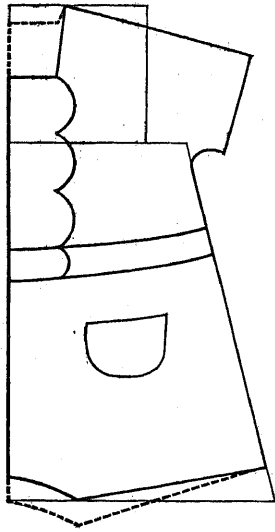
3、ゆるみ 四センチ

4、肩下り 二センチ(胸圍4の $\frac{1}{6}$ )

5、衿 二一センチ

6、裾幅 二四センチ(胸圍の $\frac{1}{2}$ )其の $\frac{1}{4}$ を跨下き

型紙裁方圖



し3/4を裾口まします。跨下は二センチ程くり、脇で凡そ三センチ程上げます。なほ後は前より二センチ乃至四センチ程長くして、屈むのに便利にしておきます。

7、バンド・ポケット・前明の線等は形のよいやうに適宜に定めてよいと思ひます。これ迄一々説明しては類はしくもなり、讀みにくくもなり固定して面白くもなくなりません。

前は真直の線にして少しも差支へはないのですが多少裝飾の意味で形をつけたのです。

ポケットの口の大きさは凡そ胸圍の1/6に致しま

す。

2 用布の種類

トラルコ・ギンガム・絹ポプリン・富士絹等洗濯に耐え得るものを用ひます。

3 布の裁方

後身頃は裾口に二センチ跨下に一センチ脇に一センチ、袖口・衿ぐり等縁取りにする所は型紙其のまゝに裁ちます。

前身頃は型紙をバンドの中央から切り落し周圍に縫代を加へて裁ちます。

前の持出し布は四センチ程にし他は後身頃と同様に考へ縫代をつけて布を裁ちます。

4 仕立方

1、ポケット附

ポケットの形をこしらへ適當の位置において飾りミシンをかけます。

2、肩の袋縫

3、衿ぐり・前明の始末



- 左身頃は出来上り一・五センチの持出しになるやうに布を折つてミシンをかけます。次に衿ぐりミ右身頃の前明ミに續けて配合のよい斜布を、身頃の裏側に縫ひつけ表に返して飾りミシンをかけます。又表側に斜布をつけ他の端をまつりつけてもよろしい。
- 4、右身頃の上下接ぎ合せ

右身頃を上下縫ひ合せ縫代をかつておきます。

- 5、袖下・脇の袋縫

- 6、袖口の始末

衿下ミ同様に斜布で縁を取ります。

- 7、跨下の始末

前には出来上り幅二センチの見返し布を裏側につけ、後には二センチ幅の持出し布をつけます。持出し布は跨のくりに合せて裁たないミ落着きがわるいのであります。

- 8、裾口の始末

三つ折にしてミシンをかけ、ゴムテープを通して端をしつかり止めておきます。

- 9、バンド及びバンド通し

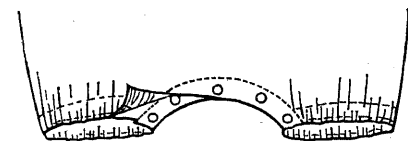
バンドの一方の先は丸みをつけ上に飾り釦を付けます。兩脇にバンド通しを作り一應着せて見てから適當の位置にスナップをつけます。

- 10、仕上げ

- 11、前明にスナップ及び飾り釦附

- 12、跨下に釦附及び穴かぶり

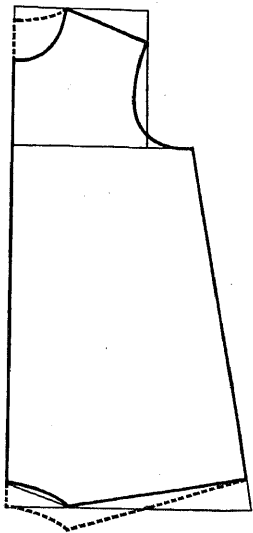
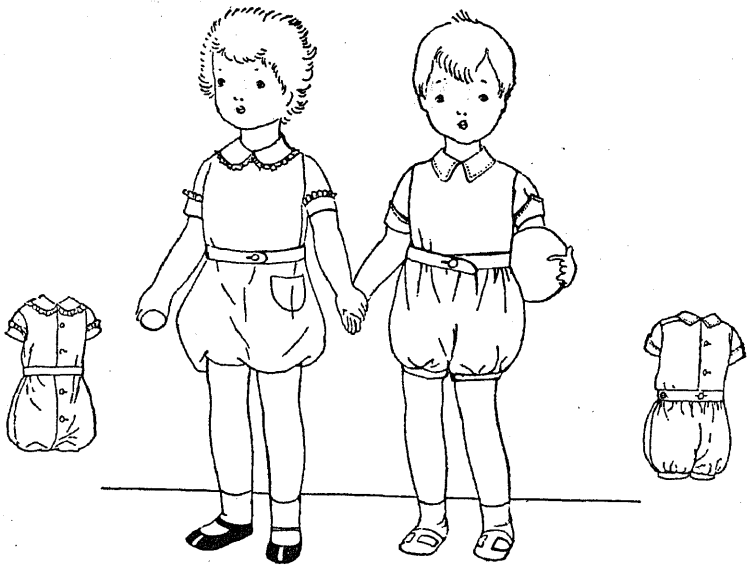
跨下に五個の釦をつけ、それに對する穴かぶりを致します。



- 2、別袖つけで後のあいて居るもの
- 次二つは何れも袖附のあるものですが左の方のは後が全部あいて居り右の方のは後の上部だけ明いて居り下の方はバンドがついて後

跨下はスナップぎめにしてもよいのですが、はづれ易い所ですから兩端を釦ぎめミし中をスナップ留にするのがよいやうに思ひます。

出来上り圖



を下げるやうになつてをります。それ故右の方のは  
 胯下を縫ひましたも不便ではありません。なほ裾に  
 は口布がつけてあります。

四歳用假定寸法  
 身長 九二センチ  
 胸圍 五〇センチ

1 型紙の裁方

◎後が全部あいて居るもの(左の方)

身頃

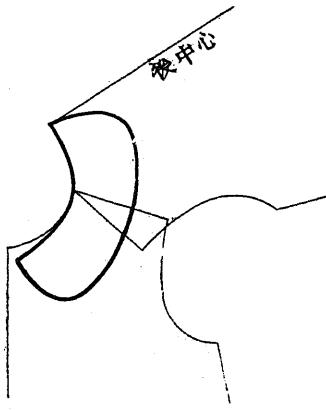
- 1、丈 四六センチ(身長の $\frac{1}{2}$ )
- 2、衿ぐり、胸圍  $\frac{10}{10}$
- 3、ゆるみ 四センチ
- 4、裾幅 二五センチ(胸圍の $\frac{1}{2}$ )其の $\frac{1}{4}$ を胯下とし

3/4を裾口にするこゝは前のこゝ同様であります。  
 跨下は二センチ程くり、脇で凡そ三センチ程上げま  
 す。

なほ後は前より少し長くして屈むのに便利にしてお  
 くこゝも前こゝ同様です。

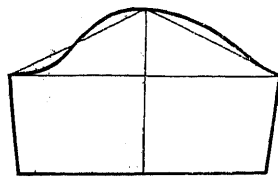
衿

- 1、肩の重り 三センチ
- 2、衿幅 凡そ五センチ



- 1、袖 丈 一三センチ

- 2、山の高さ 袖ぐりの 1/5
- 3、斜線 袖ぐりの 1/2
- 4、袖口 二〇センチ



◎ツロースの後にバンドのある  
 もの(前頁出来上り圖中右の方)  
 身頃

- 1、丈 四六センチ(身長の 1/2)
- 2、衿ぐり 胸圍 10
- 3、ゆるみ 四センチ

- 4、裾幅 二五センチ(胸圍の 1/2) 其の 1/4を跨下  
 し 3/4を裾口にするこゝは前のこゝ同様であります。  
 跨下を二センチくり脇で凡そ三センチ程上げるこゝ  
 も前こゝ同様です。
- 5、前脇の線

斜線其のまゝでゆるみが多すぎれば内側へ適當に  
 ります。

- 6、後

ジロースの上を中央に於て、ウエストラインより三センチ程上にあげ幅に於てギャザーの分三センチ程廣くします。

衿、袖の裁方は前ミ略々同じであるが、衿は前後ミもまゝるみがついてゐない。

## 2、用布の種類

前ミ同じです。冬向きには袖丈を長くしジャージの類もよいと思ひます。

## 3、布の裁方

後明に二センチの重りミなるやうに、持出し、見返しに分ミして五センチ、ジロースの後のはなれる方即ち右の方のは後の胴に重りの分七センチ程加へて裁ち、その他は適當に縫代を入れて裁ちます。

バンドの幅二センチ乃至二・五センチの出來上り。バンドの丈 胴廻りミ重りの分(七センチ)を加へたもの。

カフスの幅 四センチ 丈凡そ二一センチ。

裾口布の幅一・五センチ 丈は股の太さ

## 4、仕立方

◎後が全部あいて居るもの(三五頁出來上り圖中の左の方)

1、ボケット附

2、後明の始末

3、肩及び脇の袋縫

4、袖

袖下を袋縫ミし、襷を取つた飾り布を、袖口布の表裏で挟んで縫ひ、袖口布の表を袖の裏に合せて縫ひ、袖口布の裏の端を折り縫目にくけつけておく。

5、袖附

山の前あたりは袖を稍々ゆるめに下の方は袖がゆるまないやうに注意してつけ、縫代は二枚一緒にかゞつておきます。斜布で縫代を包む人もありますけれどかたくなつて却つてよくないと思ひます。

6、衿及び衿附

袖口ミ同様に衿の表裏で飾布を挟んで縫ひ、縫代を細く裁切り、表に返し身頃ミ斜布ミで衿を挟んでつ

け、斜布の端を折つて身頃にくけつつけます。前衿附に於て衿がゆるむきをかしいから特に注意を要します。

7、胯下の始末

前には出来上り幅二センチの見返し布を裏側につけ、後には二センチ幅の持出し布をつけます。持出し布は胯下のくりに合せて裁たないで落着きがよくありません。こゝは前のと同様です。

8、裾口の始末

三つ折にしてミシンをかけゴムテープを通じて端をしつかりきめておきます。

9、バンド及びバンド通し

10、仕上げ

11、釦附及び穴かぶり

◎ジロースの後にバンドのあるもの(三五頁出来上り圖右の方)

1、後明の始末

2、肩及び脇の袋縫

3、袖及び袖附

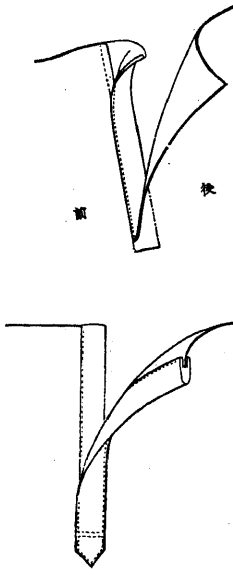
4、衿及び衿附

5、ジロースの脇下半分の袋縫

6、胯下袋縫

7、裾口を口布の寸法に縫縮めて口布をつける。

8、脇明に持出し見返しつけ



9、バンド附

ジロースの上を縫縮めてバンドをつけます。

10、仕上げ

11、釦附及び穴かぶり

# 街で拾つた噺

水谷年恵子

## 五郎ちゃんとお官鳥

五郎ちゃんがおうちの前で遊んでゐるさ、お隣のうちの九官鳥が、「馬鹿やーい。」とさなりました。お隣の小父さんは今朝戸を締めて工場へ行つて、籠の中の九官鳥が留守番をしてゐたのです。此の九官鳥はお金をさつさり出して買った鳥で、大へん賢い九官鳥ですから小父さんが大切に飼つてゐました。小父さんがうちに居て一生懸命仕事をしてゐるさ、此の九官鳥は、「お利口さん」と言つて褒めます。小父さんがお茶碗をさ壊したりするさ、九官鳥は、「馬鹿やーい」と言つてわらひます。

五郎ちゃんは今日小父さんが留守なのに九官鳥が、「馬鹿やーい」と言つたので吃驚しました。そして變だと思つて、そつち小父さんのうちのお庭の方へ行つて見るさ、泥棒が雨戸をこじあけてお座敷へ上つて、小父さんの物を盗まう

さしてゐるさころでした。五郎ちゃんは直ぐに近處の交番へ飛んでいつて、

「お巡りさん、泥棒、泥棒、早く、早く。」

さ告げました。お巡りさんは、「よしつ。」と言つて五郎ちゃんを舐めて來ました。

泥棒は大きな風呂敷包を背負つて、九官鳥のはいつてゐる籠を抱へて小父さんのうちから出て來ました。お巡りさんは、「こらつ。」と言つて泥棒を捕へました。そして九官鳥の籠も風呂敷包も取戻してしまひました。するさ九官鳥が大きな聲で、「お利口さん」とお巡りさんを褒めました。

小父さんが歸つて來て此の話をきいて五郎ちゃんの頭を撫で、

「五郎ちゃんはえらい。五郎ちゃんのお蔭で九官鳥がたすかつた。」

「お禮を言ひました。するさ九官鳥が五郎ちゃんの方を向いて、「お利口さん、お利口さん。」と褒めました。」

### 迷子のアンコ

アメリカ人のレモンさんの奥さんは犬ころを自分の子のやうに可愛がつてゐました。此の奥さんがあまり犬ころを可愛がるので、近處の人達は此の奥さんのこみを犬の奥さんと呼んでゐました。犬の奥さんに子供のやうに可愛がられてゐる犬ころはアンコといふ名でした。

犬の奥さんはアンコを抱いたり、撫でたり、おいしい物を食べさせたりして毎日可愛がつてゐました。そのアンコが或日ふつみ見えなくなりました。さあアンコは何處へ行つたのでせう。犬の奥さんは泣きさうになつて探して歩きまわりました。アンコ、アンコ、みんなに呼んで歩いて、可愛いアンコは何處からも出て来ません。犬の奥さんは交番に行つてお巡りさんに頼みました。あつちの交番にもこつちの交番にも、方々頼んでお巡りさんに見付けてもらふこゝにしました。それから新聞に、アンコを見つけて連れて来て下さつた方にお金を澤山上げます。」と出しました。

何日たつてもアンコは見附かりません。お巡りさんにも、新聞を読んだ人にも、誰にも見附からないのです。犬の奥さんはたまらなくなつて、今度は小學校の先生にお頼みして、小學校の子供達に見付けてもらふやうに先生からお話して頂きました。先生からアンコのお話を聞いた小學校の子供達は、學校の行きや歸りに、「アンコはゐないか、アンコよ出て来い。」と思つて方々よく見て歩きました。

或日正ちゃんが學校の歸り路で、先生から聞いたアンコに出遇ひました。「アンコがゐた。」と喜んで正ちゃんはその焼芋屋から、一錢出して焼芋を一つ買つて、アンコに見せては、お出で、お出でをしてうまく犬の奥さんのうちまで連れて來ました。

アンコが歸つたので犬の奥さんは飛上つて喜びました。そしてアンコを抱いて、正ちゃんの頭も撫でて、アンコには御馳走を食べさせ、正ちゃんにはごつさり御褒美を下さしました。

忽七版

東京女子高等師範學校  
教授・附屬幼稚園主事

倉橋惣三先生新著

▲四六版三百餘頁頗る美本  
▲口繪十六枚・挿繪多數入  
▲保育法の實際・實景紹介  
▲定價二圓五十錢送十六錢

# 幼稚園 保育法と眞諦

## ○倉橋先生保育眞諦

日本のフレイベル倉橋先生の代表的名著茲に出来。發行後僅に數ヶ月にして既に七版を突破し、我が國保育界の明星として一齊に大歡迎を受け愛讀又熱讀さる。東京女高師附屬幼稚園の園児等は先生を「おぢさん」と稱して相敬慕す。此の倉橋先生の保育法の眞諦即ツを悉く本書に披瀝さる。

## ○現代の保育法原論

本書は懇願數年初めて完成されたる新著にて、現代に於ける最も完備し且系統も保育法原論である。倉橋先生は稀に見る純眞の教育者と著書少く系統も力作は本書のみ。

## ○保育界耆宿の力作

著者は幼児教育竝に家庭教育の第一人者として曩に長くも此點に御關心深き 兩陛下の御前講演の榮に浴され又屢各官家よりの御招聘も我國保育界の耆宿にて、本邦第一の東京女高師附屬幼稚園主事ニ文部省社會教育官とを兼ねられ人間味豊かな人格者として定評の士である。

### 本書の特色

- 第一篇 幼稚園保育法の總論
  - 一 教育に於る目的と對象
  - 二 幼児生活と幼稚園生活
  - 三 生活へ教育を形骸
  - 四 幼児生活の自己充實
  - 五 幼児生活の充實指導
  - 六 幼児生活の誘導
- 第二篇 保育法の實際
  - 一 無家保育
  - 二 無家保育の意義
  - 三 誘導の保育案
  - 四 保育案の採りどころ
  - 五 保育案と保育項目
  - 六 保育案立案度及徹底度
  - 七 保育案と自由遊び
  - 八 保育案と保姆
  - 九 保姆の創造性
  - 十 保姆の生活性
  - 十一 保育過程實際
  - 十二 自由遊びから仕事へ
  - 十三 三個分團組
  - 十四 四個の時間割
  - 十五 生活態度による分團組
  - 十六 流れゆく一日
  - 十七 生活の向け方
  - 十八 生活の偶發性
  - 十九 日々の實際生活の尊重
  - 二十 おかへり
  - 第四篇 保育誘導案の試み
    - 一 旅へ
    - 二 大賣出し
    - 三 人形の家を中心として
    - 四 わたし達の自動車
    - 五 特急列車「うさぎ」號

東洋圖書株式會社發行

東京市神田區保一丁目一丁  
東 京 東 亞 一 〇 三 〇 七 番



〔書良の備必須必〕

東京女高師教授 倉橋惣三先生 同校新庄よここ先生 共著  
洋綴天金上製 菊判四八〇頁 定價三圓八十錢

# 本日幼稚園史

特色 一、二十年苦心の結晶漸く完成す 大震災にて一時頓坐更に繼續再計畫の上蒐集考察研究完成す。  
二、草稿千餘枚挿繪數百整理成る 倉橋先生畢生の努力と新庄先生懸命の助力にて此の名著成る。  
三、日本幼稚園史として比類なし 歴代 皇后陛下行啓の榮を得し我が國幼稚園本山の大記念塔。

〔内容目次〕

- 第一編 沿革及施設史
- 第一章 幼稚園開設前期
- 第一節 明治文化の建設
- 第二節 幼稚園開設の機運
- 第三節 幼稚遊戯場
- 第二章 幼稚園開設
- 第一節 女子師範學校附屬幼稚園の創設
- 第二節 設立後の經過
- 第三節 開園及開業式
- 第三章 女子師範學校附屬幼稚園(一)
- 第一節 創立當時の規則及學年休業日
- 第二節 建物庭園及職員
- 第三節 保育科目及保育用具
- 第四節 幼稚園參觀記及追憶
- 第四章 女子師範附屬幼稚園(二)
- 第一節 行啓 恩物の名稱その他
- 第二節 行幸
- 第三節 恩物
- 第五章 保嬰養成機關
- 第一節 保育見習生
- 第二節 保母練習科の設置並に廢止
- 第六章 唱歌遊戯
- 第一編 公令、功績者、保育文獻
- 第一章 功績者
- 一、中村正直氏
- 二、關信三氏
- 三、松野くらら女史
- 四、豐田英雄女史
- 五、小西信八氏
- 第二章 保育文獻
- 第三編 其後の普及發達

幼稚園の名著

六六版 森川正雄著 森川正雄著 森川正雄著 森川正雄著

幼稚園の理論及實際

送價二〇〇六 森川正雄著

幼稚園の經營

送價二〇〇五 森川正雄著

幼稚園の教育

送價二〇〇六 森川正雄著

幼稚園の教育法

送價二〇〇六 森川正雄著

東京大阪 東洋圖書株式會社發行

東京市神田區神保町一丁目・振替東京一〇三七番  
大阪市南區內安堂寺町一丁目・八番地・振替大阪三五九番

# スタンブウォーク

東京女子高等師範學校教諭

山 形 寛

スタンブウォークと言ふのは、その言葉が意味する如く、諸種の原形を繰返して捺印することによつて、簡易に一種の模様を生み出す仕事を言ふのである。

この仕事は小學校に於ては、可なり前から手工或は圖畫の一作業として著目せられて來たものであるが、幼稚園でやつても悪くないことと思ふから、簡單に二三の例に就てお話しやう。

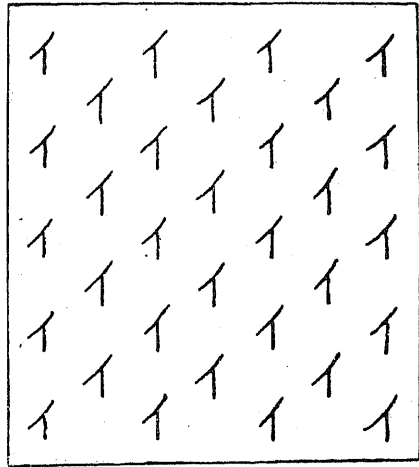
印を押すと言ふことは、唯それだけでも子供等にまつて相當興味のあることである。一三人の子供を集めて、肉池と數個の印、(それは筆の軸や鉛筆の軸のやうな簡單なものでよい)を與へて置けば、二十分や一時間位は捨て、置いても面白く遊ぶものである。十數年前に米國で發行された、インダストリアル、アート、テキストブックには、圓、

三角形、正方形、長短の線と言つたような幾つかの基本的な形の印で、積木で色々な立體的なものを構成させるやうに、平面的に諸種の形象や、模様などを構成させやうと試みて居るが、あゝ言ふことも、あまり理窟つぼく考へてやつたのでは面白くないが、遊戯的にやれば相當の面白さはある。

然し私が此所でお話しやうと思ふのは、あまり組織立つた方法では無く、何んでも手近にあるものを原形として採用し、それを押すことによつて、繰返しの美しさとか、排列の面白さとかに觸れ、或る種の造形的興味を起させやうと言ふ位のものである。

## 二

何でも同じやうなものが或る程度に繰返されるを、そこに一種の面白さが湧いて來るものである。例へば片假名の



イの字の如きものでも、次の圖のように繰返して來るこゝ種の裝飾的な面白さが生じて來る。

北原白秋氏の、「灯のまはりの羽蟲」に言ふ文字を排列した詩がある。

蟲

蟲 蟲

蟲 蟲 蟲 蟲

蟲 蟲

蟲 蟲 蟲 蟲

これなきは、讀んだのでは面白くない。蟲と言ふ文字の形も、その繰返しに排列の面白さまで如何にも灯にむらがつて來る蟲の感じを面白く出して居るのである。

繰返しや排列の面白さを出すことは、むづかしく考へて來れば限りの無いものであるが、子供等が無心になす繰返しや排列の中にも、限り無い美しさの現はれることがある。それを唯眺めさせるだけでよいのである。理窟つけたり、型にはめたりする要はない。

只べたゞ紙の上に印を押して行く、さうするところこに様々な形が、排列が、生れて來る。それを見て、こんなのが出來た。模様のやうになつた。一寸變つたものが出來たと言つたやうな感じが起るであらう。唯それだけでよいのである。その間にいろいろなよい芽が伸ばされて行くのである。

三

スタンプウォークの材料としては、印になる材料と肉地と紙とさへあればよい。

印になる材料としては、筆や鉛筆の軸の圓や六角、紙片、小さな空箱、木の實、草の莖なきの切口、釘の頭、等々何でも手近にあるものをそのまま用ふか、多少の加工(少し言葉が大げさだが)して用ふのである。

肉池又は肉こしては、スタンブ用に出来てゐるあれを用ひ、色も紫、赤、緑等數種あれば最もよい。墨汁のやうなものでも、水彩繪具のやうなものを用ひてもよい。

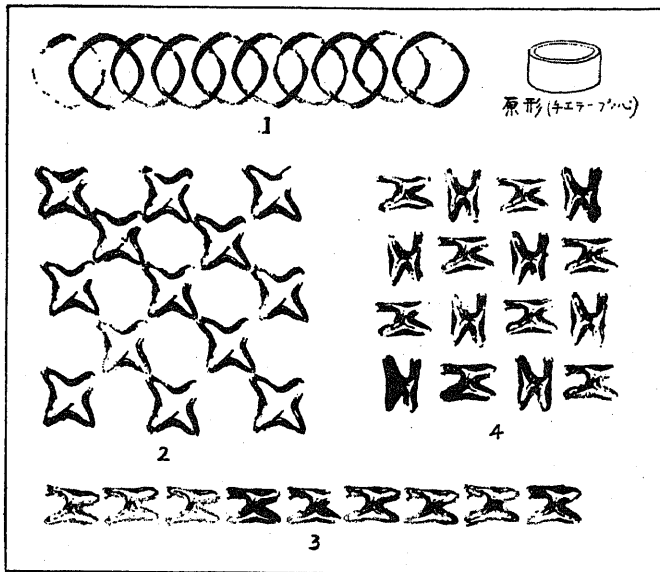
紙は普通の畫用紙、圖研紙のやうな多少吸収する性質のある紙、日本紙等何れでもよい。又無地の紙でもよく、淡色の方眼紙なきを用ひてもよい。

次に二三の作例をお目にかけてませう。これは子供の作品では無いから、多少整ひ過ぎて居るかも知れんが、實際子供にやらせる時はおつゝ自由なものでよいのである。

#### 四

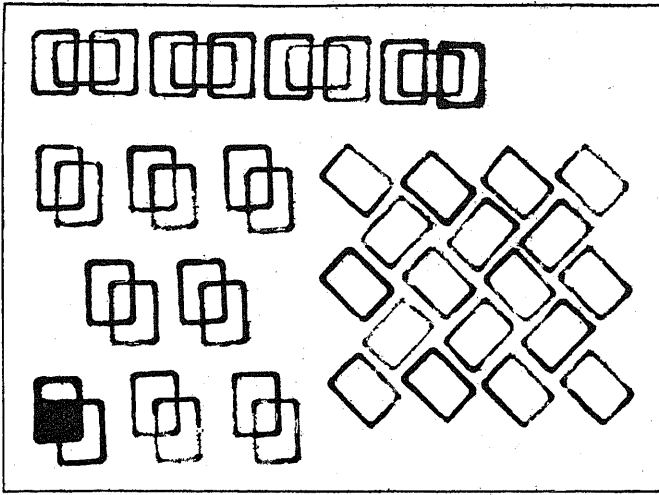
第二圖は手工テープの心になつて居つたボール紙の輪を印材として用ひたので、1は圓形の輪を四方から少し押しつぶしたものを重ね合せて押し行つたもの、2は更に四方から押し凹めたもので、市松模様風に押し行つたもの、3は更に兩側から平に押しつぶしたものを平に並べて押し行つたもの、4は之を交互に縦横に押し行つたもの、

圖 二 第



の、3は更に兩側から平に押しつぶしたものを平に並べて押し行つたもの、4は之を交互に縦横に押し行つたもの、

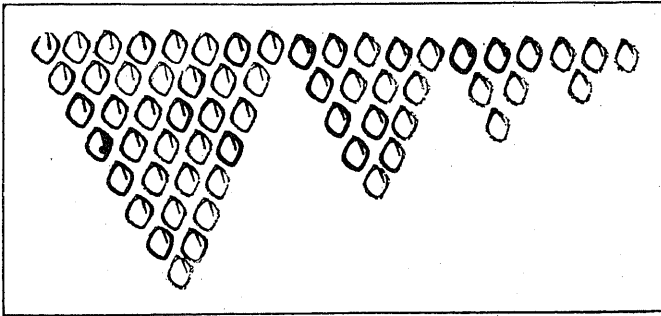
第 三 圖



のである。一つの簡単な資料でもまだく澤山の排列を得ることが出来るでせう。

第三圖は曲線定規のはいつて居つた、細長いボール紙の

第 四 圖



筒の小口を印材として用ひたものである。これは見られる如く、何れも形は少しも變へないでそのまゝ用ひ、排列だけを變へたものである。尙ほ本圖は肉として墨汁を用ひた

四四

ものであるが、左下のよごした箇所は墨汁をつけ過ぎて、薄い膜のはつて居るのを知らずにそのまゝ押したものである。

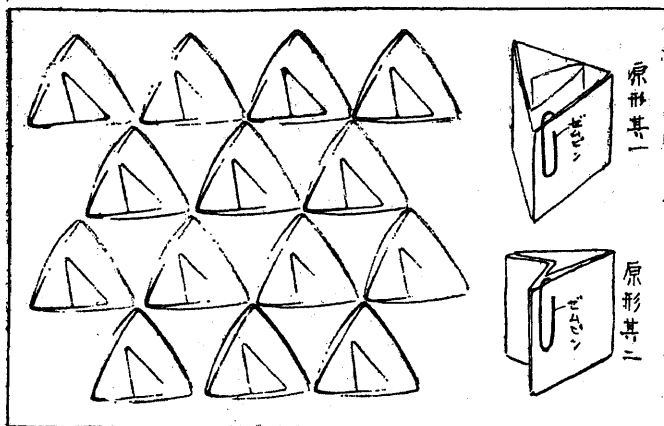
第四圖は紙巻煙草の朝日の吸口を印材として用ひたものである。

以上第二圖から第四圖までに示した如き資料は手近な所にいくらでも

あるであらう。

### 五

次に畫用紙又は端書なきで原形を作つて捺印する例を示

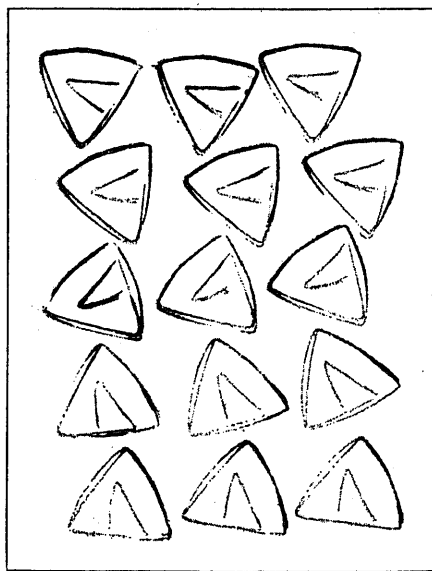


さう。

### 第五圖

は、畫用紙を幅三  
 纏位に帶  
 狀に切つ  
 たものを  
 初め細か  
 く、漸次  
 大きく折  
 り疊み、  
 小口が揃  
 ふやうに  
 して、ゆ  
 るめて外

圖 六 第

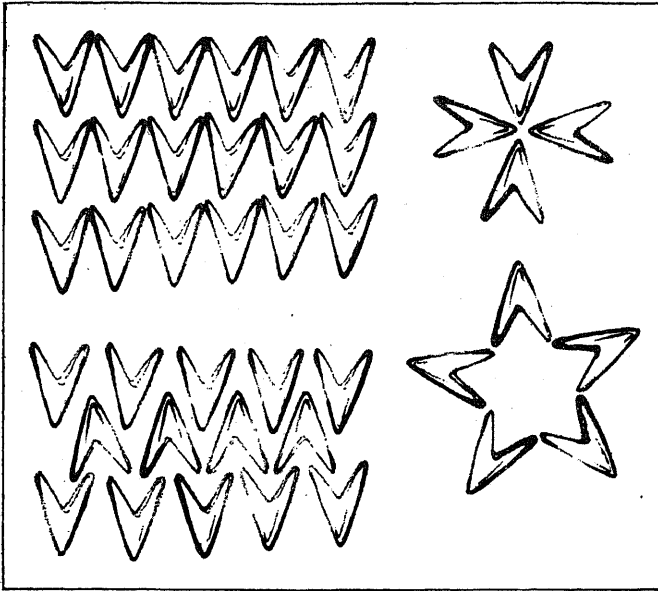


側が三角形をなすやうにし、端はゼムピンで止めるか、糊  
 で止め原形其の一の如くしたものを印材として用ひ、鱗形  
 に押したものである。

第六圖は、同じ印材で、やゝ不規則に押して作つたもの  
 である。

第五圖と第六圖を比較するに、前者は線が幾分細くな  
 つて居るが、之は印が新しいからである。だんく使つて  
 居るに先端が少しづつぶれて線が太くなるのである。印が少

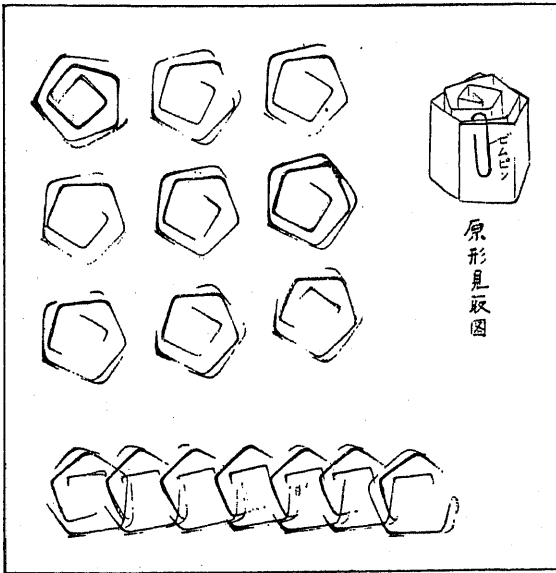
第七圖



しつかれて来て来て線の太くなつた方が、かへつて面白い場合が少くない。

第七圖は前二圖に用ひた原形の、一邊を中に押し込んで

第八圖

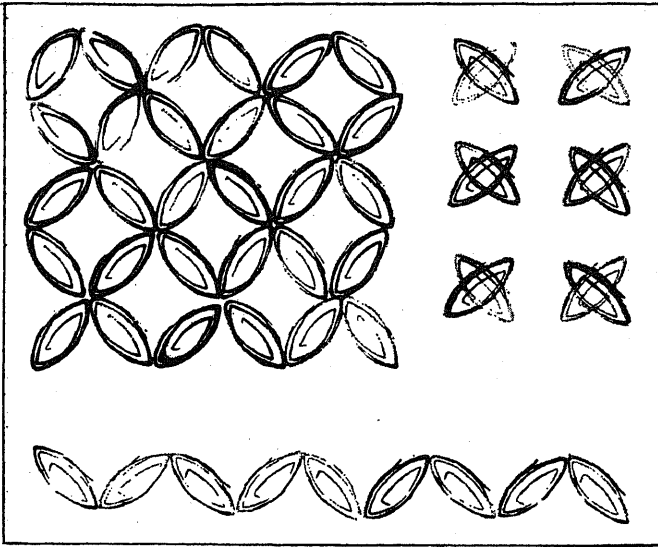


平たく折り疊み、第五圖に原形其の二に示したやうな形にしたものを印材として用ひて作つた、四方連續模様と獨立模様とである。これは印がよほぎつかれて来て来て線が軟く太くなつて居る。

第七圖に用ひたやうな形は甚だ多くの變化ある圖様を求

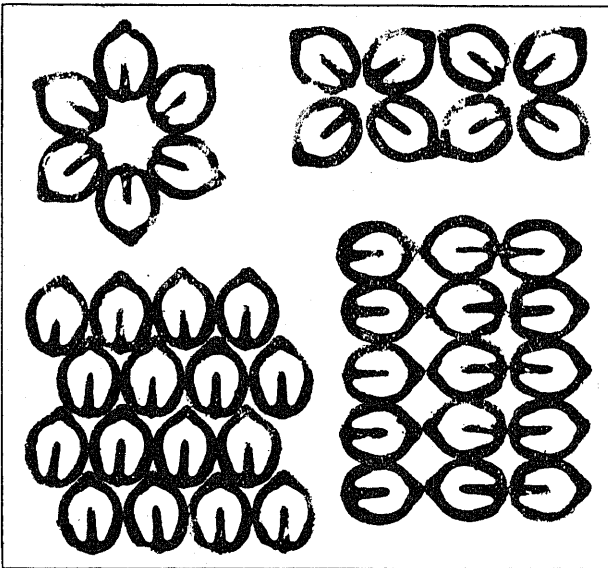
原形見取圖

第九圖



めるこころが出来る。  
 第八圖は同じやうなやり方で、原形を五角形にまこめたものを用ひた例である。

第十圖



第九圖は、約三種幅に切つた畫用紙の帯を、鉛筆の軸に巻きつけ、それをゆるめて小口を渦線状にし、端を止めたものを、二つにつぶしたものを印材として用ひたものである。かう云ふ曲線状のものになるに一層面白くなる。



## 六

最後に自然物を印材として用ひた例を一つお目にかけよう。

第十圖はくるみの實を縦に二つ割にしたものを、紙鏝の上で磨つて平にしたものを資料としたものである。之は線が太く、感じが素朴で、人爲の材料よりも一層味がある。排列も子供に考へさせればもつと色々出来るであらう。

自然資料はよいものが澤山あるから、又の機會にいろいろ御目にかけることにしやう。

以上掲げた例はあまり適切なもので無かつたかも知れんが、作業それ自身は相當面白いことであり、進んでは色々な印刷術と結びつくことであつて、意味のあることであるから、お試しをおすすめする。

(三一頁より)

第二小白齒

十——十二

犬齒

十一——十二

第二大白齒

十一——十三

第三大白齒(智齒)

二十歳以上

當園内に於ては園児をして常に口腔清潔を守らせる様に、「齒ブラシ」の使用をすすめ、食後には含嗽する良習慣を涵養することに齒ブラシ教練を行ふて居る。

尙ほ定期口腔検査を行ひ時に齒牙に就き検査票を作り、その状況を家庭に通知し、家庭と協力して可及的早期に治療する方針であるが、尙ほ進みては園内に齒科の治療室を設け、家庭にて治療し難きものは保護者の承諾の下に園内齒科治療所にて處致する様に成ることは園児保健上實に急務と信ずる次第である。

湯淺氏は、東京女子高等師範學校附屬小學校及び附屬幼稚園の齒科の診察及び診療を御願申上げてゐる方でございませう。

(係り)

# 鳩ちゃん

高島巖

絢子さん、昭子さん、毬子ちゃんは、三人姉妹でした。

絢子さんは、今年十一で尋常四年生、昭子さんは八つでこの四月から尋常一年生、毬子さんは六つで、やはりこの四月から幼稚園へ行くことになつてゐます。

\*

ある天氣のいい日曜日の晩のこゝです。

家中うちでお夕飯をいただいてゐる時、お父さまがおつしやいました。

「毬子、昭子、絢子。いいお家うちが見つかったよ」

「えッ、何處どこに？ 學校、近い？」

「ああ、學校の直ぐ裏だよ」

「あらさう、ぢや、昭子さんに丁度いいわね」

「うむ、それから、毬子にもいいこゝがあるよ」

「あら、なあに？」

「毬子。毬子鳩ちゃん、好きだらう？」

「ええ、毬子鳩ちゃん大好き」

「その鳩ちゃんがたくさんゐるんだよ」

「まあ」

「大きな森があつてね、その森の真中にお官があるんだ」

「あら、そのお官にゐるのね、鳩ちゃんが」

「さうだ。さてもたくさんゐるんだよ」

「まあ、いいわね。お父さま、早く越してよ、何時越すの？」

「？」

「二月十一日」

「あら、紀元節？ その日學校で式があるわ」

「絢子は、學校から真直ぐ、新しいお家へ歸ればいいだらう？」

う

「でも、お道がわからないわ」

「大丈夫。お父さまが、ちやあんご地圖を畫いてあげるから」

ら

「昭子と毬子ちゃんはお父さまが連れて行つて下さるでせう？」

「うむ、昭子はお父さま、毬子はお母さまと行くことにし

やう

\*

こんな風で、毬子ちゃんたちは、森の側の新しいお家へ越して來ました。

初めの日はごたごたしてゐて、お宮までは行けませんでしたが、明日の朝、目がさめたら直ぐにお宮へ行くお約束をして、おやすみしました。

\*

「お母さま、お母さま、お母さま」

「なにさ、朝から大きな聲を出して。びつくりするぢやありませんか」

「ううん、あのね、持つて行くの」

「なにを、何處へ持つて行くの？」

「お宮へ。そして食べさせるの」

「ああ、鳩ちゃんに？お豆ね」

\*

毬子ちゃんたちが、お宮へついた時には、もうお陽さまが森のあたを離れて、お宮の地面一杯に當つてゐました。

「ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク」

「ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク」

「あら、ゐたわ、ゐたわ、ゐたわ、随分たくさんゐるのね、お姉さま」

「さうね。あら、向ふからも來るわ」

「昭子お姉さま、早く、お豆をあげませうよ」

「ええ、毬子ちゃん、これあげてごらんなさう」

毬子ちゃんが、お豆を一つかみ放つてやりますと、向ふからもこつちからも、たくさん鳩ちゃんがやつて來て、目を白黒させながら食べ始めました。

「ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク」

「ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク・ク」

「ああ、食べろわ、食べろわ。もつこやりませうよ」

持つて参りましたお豆を、すつかりやつてしまひますよ。

みんなは大急ぎでお家へ歸つて來ました。

\*

「お父さま、お父さま、お父さま」

「なんだい、大きな聲を出して」

「あのね、ゐたの。随分たくさんゐましたよ」

「さうか、鳩ちやんだらう。そんなにたくさんゐたか？」

「ええ、とてもたくさん。毬子がね、お豆をやつたら、向

ふからもこつちからも、たくさんやつて來たの」

「うむ」

「そしてね、ククククククククツて食べたの」

「さうか、それはよかつたね。夕方になつたら、もう一へ

ん行つてごらん、こんごはお米を持つて」

「あら、鳩ちやん、お米でも食べられるの？」

「そりや食べられるさ。ひよつこしたら、お豆よりもお米

の方が好きかも知れないよ」

\*

絢子さんは學校へ行きました。

お父さまはお役所へ。

昭子ちやんも毬子ちやんは、お母さまも御一緒に、お家のおかたづけをいたしました。

\*

夕方、絢子さんが、學校から歸つて來ますよ、又、みんなしてお官へ出かけました。

鳩ちやんたちは、朝も同じやうに、みんなの側へやつて來ました。

ところが、その時、絢子さんが、はツミして見るよ、たくさんゐる鳩ちやんのなかに、なんだか變な足ざりをした鳩ちやんが一羽ゐるのです。よく見るよ、その鳩ちやんは、足が片つぽまがつてしまつて、うまく歩くこゝが出来ないのでした。

「毬子ちやん、昭子さん」

「なあに？」

「ほら、見てごらんなさん」

「どうれ？」

「かわいさうね、あの鳩ちゃん、足がわるいのよ」

「あら、さうね、さうしたんでせう」

「それさ、何處にゐるの、さうしたのさ」

「ほら、あそこの樹の蔭に、みんな離れてゐるでせう」

「あら、うまく歩けないのね」

「穂子ちゃんたちは、その足のわるい鳩ちゃんを見て、か

わいさうでかわいさうでたまらなくなりました。

「さうしたんでせう」

「痛たさうね」

「あの鳩ちゃん、まだ子供のやうだけき、お父さんやお母

さん、ゐるのかしら」

「穂子ちゃんたちは、餘つてゐるお米を、みんなその鳩ち

やんの側へまいてやりました。ところがかわいさうに、その

鳩ちゃんが食べやうとするに、他の元氣のいい鳩ちゃんが

やつて来て、みんな食べてしまふのです。

「鞠子さんも昭子さんも穂子ちゃんも、かわいさうでかわ

いさうで仕方がありませんが、さうするこも出来ません。

足のわるい鳩ちゃんは、二つ三つ食べただけで、すこ

ごこ、又みんなのゐない方へ行つてしまひました。

\*

夕方のお空は紅く、夕焼が暮を張つてゐました。

「鞠子お姉さま、歸りませうよ」

「ええ」

「鞠子さんも、昭子さんも、穂子ちゃんも、黙つて歩き出

しましたが、三人も心のなかで、

「さうしてあんなになつたんだらう」

「わるい子供にいぢめられたのかしら。それこそ、わるい

鳥にいぢめられたのかしら」

そんなごこを考へながら、お家へ歸りました。

▽……………▽

晝のやうでもあれば、夜のやうでもある、不思議なあか

らさが、その邊一杯にたちこめてゐました。夢です。

大きな森があつて、その真中にお宮があるのです。その

お宮の屋根の下に、丸い穴のあいた鳩ちゃんの巢が、たく

さん竝んでゐました。

その一つの巢の側に、絢子さん、昭子さん、毬子ちゃんが、立つてゐるのです。

\*

お母さん鳩、お父さん鳩も、それに子鳩が一羽、寝てゐました。

やがて、子鳩が、目をさしました。

そして、お母さん鳩を起しました。

お母さん鳩が、目をさしました。

そして、お父さん鳩を起しました。

お父さん鳩が、目をさしました。

そして、みんな、着物をきかへにかかりました。

お父さん鳩のお支度は、黒い洋服に縞のズボンでした。

お母さん鳩のお支度は、赤い洋服に格子のスカート、

それに真白いお前かけでした。

子鳩のお支度は、藍色の上衣に同じ藍色の半ズボン。

ところが、その子鳩の足に繻帯が巻いてあるのです。

「あら、さうしたのかしら、怪我でもしたのかしら」

と思つて見てゐます。鳩ちゃんたち親子が、お話を始

めました。

「おい、坊や。今日は、足の痛みはさうだい？」

「ありがたうございます。今日は、大變いいやうです」

「され、繻帯をほご てごらん」

「大丈夫ですよ、ゆふべ巻きかへたばかりですもの」

「でも、お父さんが一ヘン見てやらう」

「さうですか」

子鳩が繻帯をほごき始めます。お母さん鳩。

「坊や、だめだめだめ。お母さんがほごいてあげませう」

云ひながら、靜かに、ほごきにかかりました。

繻帯がすっかりほごけたところを見た絢子さん、昭子さ

ん、毬子ちゃん、びつくりして、からだを寄せ合ひました。

「まあ」

「まあ」

「まあ」

眞赤にはれた足首のところに、空氣銃の彈丸でもあたつたやうなきづ、口が見えるのです。

「ほんこくに困つたものだね、人間の子供たちは。大事な

坊やにこんな怪我をさせるなんて」

「さうですよ。あの時、若し弾丸が外れて胸へでもあたつたら、さうするんでせうね。たつた一人しかない坊やが、死んでしまふぢやありませんか」

「人間の子供つて、みんなあんな子供ばかりかね」

その時、子鳩が、急に顔をあげて申しました。

「まごころが、お父さん、さうぢやないんです。人間の子供たちのなかにも、ほんまうにやさしい氣持の子供がおりますよ。昨日の夕方、僕がお窓から外を見てゐるまご、ちいさな女の子が三人、お米を袋に入れてやつて來たんです。

そして、みんなにそのお米をやつてゐたので、僕もついほしくなつて下りて行つて食べやうとしたら、なにしろ僕この足でうまく歩けないでせう、他の鳩たちが先に走つて行つてみんな食べてしまふんです。僕つまらなくなつて、ぢいッきみんなの食べる様子を見てゐたら、そのうちの一番お姉さんが僕を見つけて、妹らしい子供に、僕の方へ投げやうに云つて呉れたんです」

「うむそれから？」

「それから、僕、漸くありつけたと思つて食べやうとしたら、僕が二つか三つしか食べないうちに、又、他の鳩がやつて來て、みんな食べられてしまつたんです」

「うむ」

「そして、その三人の子供たちつたら、目に涙まで浮べながら、僕の方を、かわいさうだなあ、ま云ふやうなお顔をして、見てゐて呉れたんですよ。僕、その親切のこもつた六つの目を見てゐたら、もうお米のまごなんか忘れてしまつて、もつこもつこその子供たちと一緒にゐたいと思つたけき、なんだかきまりがわるくなつて、歸つて來てしまつたの」

「うむ、なるほぎね」

「たくさんの人間の子供たちのなかには、あの子たちのやうないい子供だつて、きつこゐるに違ひないと思ひますよ。」

さうか、それは感心な子供だ。そんな子供なら、一ペン、お父さんも會つて見たいものだね」

お父さん鳩が、さう云つた時、子鳩が急に、絢子さん、

昭子さん、穂子ちゃんのおるこに気がつきました。

「あッ、あの子だ、あの子たちだ。お父さん、あの子たちですよ。」

「ぎれ？」

お父さん鳩とお母さん鳩が、こつちを向いたので、鞠子さん、昭子さん、穂子ちゃんは、急にかくれやうこしましたが、もう間に合いません。

「もしもし、人間の子供さんたち。せまいところですが、ごうぞなかへ入つて下さい。おい、お母さん。この子供さんたちは、坊やに親切にして下さつた大切なお客さまだから、たくさん、ごちさうを差あげるんだよ。」

「ええ、ええ。わかつてゐますよ。まあ、あなた方ですか、坊やに親切にして下さつたのは。ありがたうございませす。」

お母さん鳩は、さう云ひながら、おごちさうをこしらへに、お臺所の方へ行かれました。

\*

お母さん鳩が、前かけで手を拭き拭き、出て來ました。

お部屋の真中にあるお机の上にのせられたおごちさうは、みんな、お豆でこしらへたものでした。御飯はお米でした。

やがて、お部屋の隅にあるラヂオがジーツミ鳴り始めます。それは、鳩の國の子供たちの放送で、あんまり人間の子供たちが歌ふので憶えてしまつたのが、人間の子供たちが歌ふ鳩ポツポの歌でした。(完)





# 土いじりの二三事 (二)

大 岩 金

五六

新學期になり何か忙しい時期であります。お天氣のよいお休みには郊外に摘草に、蝶追ひになぞ引き出される事が多くなりますが又家に居てもすく／＼伸びゆく木々の芽、日ましに繁る宿根草の芽、雜草、或はか弱い新芽を侵す害蟲なぞ夫々の手入に終日かかつてても尙日足らずといふ有様であります。

幼稚園では新學期になり色々新しいお道具をお買ひ入れになります。土いじり道具も今までに備へてありますれば此度改めてお求めになる迄もありませんが、これから新しく設備でもなさいますならば次のやうなものが入用であります。もつさも小さい子供相手に、折ある毎にするほんの簡単な土いじりに止まる用具を申し上げます。

## 一、用具

### 1、移植鍬

花園さいふ程の土地をもたない所で土いじりをする即ち箱や鉢で栽培する場合には此移植鍬さへあれば土を入れるにも苗を植え込むにも除草するにも専ら是を用ひ、鍬を用ひずともすむのであります。それ故是が選定にはなるべく丈夫なもので、少々の無理をしても柄の付際が曲つたり折れたりしないやうなものでなければなりません。従つて値段にも種々ありますが五十錢位は出さなければなりません。

### 2、鍬

少しでも花園らしいものがあります所では事情に依り多少の鍬を用意しておきたいものです。

植物は種子を播くには先づ土が必要であります。その下種される土はなるべく深耕して根の自由に擴がりえられるやうにしてやらなければなりません。それには移植鍬では充分になしえられません。しかし鍬は子供には無理であり

ますから保母用として備へるのであります。それで婦人用として改良鍬で充分間にあひます。

### 3、シャベル

培養土を作る穴を掘つたり、大きく株の張つたものを掘り取るなごなか／＼用途の廣いものでありますから、是も一丁備へておきたいと思ひます。

### 4、如露

雨天の日を除いて毎日のやうに入用なのは如露であります。灌水の巧拙はその熟練に依る事が大ではあります。又如露の構造の良否にも大なる關係をもつものであります。この點に注意する事も亦大切な事であり。それ故金物屋等で販賣して居ります普通の口先の短い粗いものは、園藝用の灌水用には不適當なものでありまして、園藝専門の灌水用如露で型は英國型がよろしいやうであります。即ち是は口先が長く水の出口は取替自由であり、又ゆるやかに廣面積に灌水し、或は狹面積に強くなご其向け方に依り自由自在に灌水する事が出来るのであります。又大小各種あります。使用する人の力に應じて二リットル、四リットル、

六リットル入なご適當なものを選ばよいのであります。

### 5、土篩

播種の時、移植の時なごその種子や苗の大きさにより夫々適當の土粒に篩ひわけなければなりませんから土篩も必要であります。その目の大小により俗に一分目、二分目なごいつて居りますが、最も用途の廣いのは前二種位のもので、尙餘裕があれば更に大なるものも、今一段小さいものを用意すれば結構であります。

### 6、剪定鋏

在來の木鋏では固い幹なごは切斷し難いのでこの剪定鋏を用意しておきますならば剪定、整枝はもごより支柱竹なごも容易に切斷し得られます。大いさにより、製造所に依り價も異つて居りますが和製の七吋内外の上等物で三圓位のものならなか／＼堅牢に出來てゐるやうであります。

### 7、鉢又は箱

播種又は移植に必要なものでありまして播種用には特に播種鉢なるものがあります。是は蜜柑箱を二つ切にしたもの又は是に類したものを利用すればよいのであります。是

等につきましては曾て詳しく申した事がありますので重複をさけます。その外鉢栽培をする場合に土鉢が入用なのであります。その大いさは口徑の長さに依り三寸鉢、四寸鉢などいつて居りますが移植を忌むものの外はなるべく度々小鉢から大鉢に順次取替へた方がよいのであります。それ故是も適宜大小を取混ぜて用意しておきたいものであります。

## 8、肥料用の瓶、柄杓、古バケツ

施肥するには充分に腐熟した肥料を用ひる事が最も大切であります。それ故油粕や魚肥のやうなものは豫め瓶に溶かしておいて液肥にしてやるか、或は以上の外に過燐酸石灰など加へた乾燥肥料を作つておいて適宜にやるのが安全であります。そのために瓶を目障にならない所に埋めておき是の中に腐熟させておくのであります。

柄杓やバケツは施肥の際必要であります。是は別に新に求める迄もなく使ひ古しのもので間に合ふのであります。

## 9、噴霧器

簡單なものでよいので是も用意しておきたいものです。

花屋で文化キリフキの名で販賣してゐるのなごは構造が極めて簡單でありまして薬剤を入れます器はサイダー瓶などを用ひ噴霧の具合の悪い時にはその部分を容易に分解修理する事が出来るのであります。従つて値段も安く一圓位であります。

以上であらまし間にありますが更に餘裕がありますれば腐葉土等の切返しの際用ひるマアニューホーク、土ならし等に用ひるレーキ、或は刈込鋏、木鋏など種々あります。

## 二、土

栽培の土臺なるものは土であります。土の良否はその植物の發育を左右する事が最も大であります。是が適當なものを選ぶ事は申す迄ありません。

鉢植の場合は、或程度迄は容易に温梅する事が出来、ます。露地栽培にありましては容易に全部を取替へる事の困難な場合が多いのであります。それ故極度に悪い場合を除き除々に改良するに致しまして簡單に出来る土の準備に今からきりかゝりたいと思ひます。

先づ庭の片隅で幼児に危険のないやうな場所を選び廣さ

は適宜に、深さは凡そ一米の穴を掘りこれから旺盛に出てくる雑草は暇ある毎に結實させないで抜き取り是を前の穴に入れます。又時には校庭の掃除をして掃き集めた土も入れ水も撒き又は何かの折があつて魚汁又は是等の残物があれば入れ或は灰、又は米のきぎ汁も入れるなごします。かくしまして段々に積重ね一月に一回位上下に切返しを行います。ますならばやがて是等は充分に腐熟して有機質に富んだ草花栽培に最も適當した土壤となるのであります。

又かくして春夏の候には草を入れやがて秋も末になりますれば木々は落葉しますから草に代へてこの落葉を腐熟させますならば更によい腐葉土が得られるのであります。是を適當に鉢土になり畑になり混ぜてゆくのであります。

### 三、肥料

土に次いで植物の成育に大なる影響を及ぼすものは肥料であります。その最も大切なものは要素から申しまして窒素、磷酸、加里であり私共の扱ひ易いものとしては、窒素質肥料では油粕、智利硝石、硫酸アンモニア等であり、磷酸質肥料としては過磷酸石灰、米糠、米のきぎ汁等で、加

里質肥料としては草木灰であります。

油粕は前申しましたやうに豫め液肥として腐熟させた物を始めの濃度により更に稀めて二十倍乃至四十倍にして施肥するのであります。この差は大變な隔りがありますけれどもその苗の時代から次第に盛な發育をしてゐる時期にやるのなごその差も亦かなりに大なるものでありますからその邊適當に加減すればよいのであります。要は充分に腐熟したものを濃すぎないやうに稀めてやる事であります。

智利硝石、硫酸アンモニアは濕り易いものでありますから是が保存には瓶なごに入れておき使用の都度水一・八リットルにつき二二〇グラム位の割合にまかして用ひるのであります。是等は臭氣もなく残滓もありませんので觀賞用の花卉には重寶なものであります。

過磷酸石灰も同じく濕氣を吸収し易く濕つたものは固くかたまつて肥効を奏さなくなりますからこの點に注意しなければなりません。かくて使用に當つては粉狀のまゝ他の肥料に配合し、或は油粕なごの液肥の合間にやるなご簡單に用ひられます。

# 童話 何故さう物語

——ラッドヤド・キプリング——

東京女子高等師範學校教授 中野好夫 譯

一。何故象のお鼻は長くなりましたか。

昔、昔、ずーと昔、象さんのお鼻は決してあんなに長くはありませんでした。ほんの真黒い、ブリッミふくれた、それは丁度長靴くらいの大きさのお鼻が、あの大きな體軀からだにポツンミついてゐるだけで、象さんはそのお鼻を左右にモグぐゝ動かすことぐらいは出来ました。お鼻で地面の物を拾ひ上げたり、そんなことは勿論出来ませんでした。ミころがある時、象さんに子供が一匹生まれました。ミころがこの子象君は大變な知りたがり屋の聞きたがり屋で、もうなんでもかでも根掘り葉掘り聞かなければ承知が出来ませんでした。子象君はアフリカに住んでましたが、アフリカ中の仲間達をみんな例の根掘り葉掘りの質問ですつかり困らせてしまひました。

子象君は背高の叔母さんの駝鳥さんのミころへ参りました。『叔母さん、叔母さん、あのう、叔母さんの尻尾の羽根は、何故そんなにチンチクリンになつたんです。駝鳥の叔母さんは硬いゝ距けづめで子象君をコツンミ蹴つ飛ばしました。』

子象君はノッポの叔父さんのキリンさんのミころへ参りました。『叔父さん、叔父さん、あのう、叔父さんの皮は何故そんなにポツポツがあるんです。ノッポの叔父さんは硬い硬い蹄で子象君をポーンミ蹴つ飛ばしました。』

それでも、まだ子象君はいろんなミころが知りたくて知りたくて、たまりませんでした。

今度は肥よつちよの叔母さんの河馬さんのミころへ参りました。『叔母さん、叔母さん、あのう、叔母さんの眼は何故

そんなに真赤いのです。河馬の叔母さんは平つたい大きな蹄で子象君をビシャーンミ蹴つ飛ばしました。

そこで今度は毛むくぢやの叔父さんの狒々猿さんのところへ参りました。『叔父さん、叔父さん、あのう、メロンてば何故あんなに美味しいんです。毛むくぢやの叔父さんの狒々猿さんは、毛むくぢや前足で子象君をボーイミはね飛ばしました。』

それでも、まだ子象君はいろんなこごが知りたくて知りたくて、たまりませんでした。

見るもの、聞くもの、嗅いだもの、觸つたもの、なんでもかでも一應は聞いてみなければ、子象君は承知が出来ませんでした。そしてその度に叔父さんや叔母さん達は子象君をボンく、ボンく蹴つ飛ばしました。それでも、まだ子象君はいろんなこごが知りたくて知りたくて、たまりませんでした。

ある大變お天氣のよい朝でした。子象君は、それはそれは素敵な質問を考へつきました。『あのチエ、あのチエ、鰐さんてば御馳走に何を食べるんだらうチ。するさみんなが

一度に、『うるさいッ!!!』ミ怒鳴つたかと思ふミ、みるまに寄つて集つて可哀相に子象君を蹴飛ばすやら、はね飛ばすやら、散々な目にあはせてしまひました。

子象君は仕方がないので、泣くく、藪の中のお家に住んでゐるコロく鳥さんのところへ参りました。『僕んちのチ、父さんもチ、母さんもチ、伯父さんもチ、伯母さんもチ。僕がいろんなこごを聞きたがるつて、みんな僕を蹴飛ばしちまうんだよ。だけぎ僕、やつぱり知りたいんだ、鰐さんが御馳走に何を食るかつてこごをチ。』

するさコロく鳥さんは、大變氣の毒さうに申しました。『それはチ、坊ちゃん、あの向ふの大きな河へ行つて御覽なさい。あの一杯ユーカーリの樹の繁つてゐる河岸に行つて御覽なさい。そうすれば、坊ちゃん、きつさわかりますよ。』

早速翌る朝、知りたがり屋の子象君は、バナナを百斤ミ、甘蔗を百斤ミ、それからメロンを十七ミ、それだけをちやーんミ用意して、さてお家の人達に申しました。『さよなら！僕チ、あの一杯ユーカーリの生えてゐる河岸へ行つて來ま

すよ。あのう、僕、鰐さんが何を御馳走に食べるんだか、見て來ますから手。』するごまたしても、みんな寄つて集つて、子象君が、ごうか勘辨して下さい、ごうか勘辨して下さい、一生懸命にお願いするのも聞かないで、散々に蹴つ飛ばしてしまいました。

そこで子象君はいよくお家を出懸けました。途々メロンを食べく、そしてメロンの外皮かわをそこら中にベッベツミ吐き散らしながら、歩いてゆきました。だつて子象君には外皮かわを拾ひ上げるごきが出来ないのですもの。

子象君は東へくぐり、ドンくくくく歩きました。それから今度は、また北へくぐり、ドンくくくく歩きました。其間も始終しじゆうメロンをムシヤくムシヤく頬張りながら、で到頭子象君は、あのコロく鳥が言つた通りに、一杯ユーカーリの樹の繁つた大きな河のそばへやつて参りました。

ミころで、皆さん、いゝですか。——この知りたがり屋の子象君こぞういふのは、實は、オギヤアだか、オブウだか——一聲生れて以來今日まで鰐さんを一度だつて見たごきが

ないのです。で勿論鰐さんがどんなものだか、少しも知らないのです。たゞなんでも知りたいごいふ、たゞそれだけなのです。

そこで子象君が最初に出會つたのは、大きな真黒い、それは見るも怖ろしい大蛇でした。大きな巖のまはりに黒々くろくろミジーツミミぐろぐろを巻いて居ります。

『あのう、モシ、モシ』子象さんは出来るだけ丁寧に申しました。『濟みませんが、この近所に鰐さんミ仰言る方を御覽になつたごきは御座いませんか。』

『ナニッ!! わしが鰐さんを見た……!』大きい黒い大蛇はおそろしい見幕で申しました。『ウム、それがごうした。』

『あのう、すみませんが、鰐さんミ仰言る方は、あのう、何を御馳走に召上つてゐらつしやるか、それを御伺ひしたいのですが……。』

するご真黒い大蛇はたちまちグルグルツミミぐろぐろを解いて、あの鱗だらけのザラくした尻尾で、子象君をビシヤリツミはね飛ばしました。

『こいつは變だぞ。』子象君は考へました。『たしかに變

だ。父さんも、母さんも、それに叔父さんも、叔母さんも、

——それや、も一人の河馬叔母さんや、も一人の狒々猿叔父さんならあたりまへだけぎ、——みんな、僕がいろんなこゝを聞きたがるつては、僕を蹴飛ばしたつけ。——してみるさ、何處へ行つても、同じこゝなのかなア」。

そこで子象君は、眞黒い大蛇に、出来るだけ丁寧によならを言つて、それから元通りに大蛇の體軀からだを巖のまはりに巻きつけてやつて、さて子象君はまたノコノコ出懸けました。途々メロンをムシヤク頬張りながら、外皮かわをベッベッそこら中に吐き散らしながら、出懸けて参りました。だつて子象君は外皮かわを拾ひ上げるこゝが出来ないのですもの。やがて子象さんは、ユーカリの樹の繁つた河岸の、丁度水際にやつて來ました時、突然大きな材木のやうなものをいやいふ程踏みました。

だが、皆さん、それが鰐さんですよ。驚いたやうに鰐さんは、片つ方の眼玉をバチクリさせましたホラ、こんな工合に手。

『あのう、すみませんが、さかかこの近所で、鰐さんを御

覽になりませんでしたでせうか。』子象君は、出来るだけ丁寧にたづねました。

するさ鰐さんは、もう片つ方の眼玉をバチクリさせて、尻尾をツーツミ少しばかり泥の中から擧げました。子象君は、これはまた蹴つ飛ばされやしないかと思つて、おそろくツーツミ後退りました。

『オヤ、小僧さん、こゝへお出で。』鰐さんは申しました。『お前は何故そんなこゝを聞くのだね』。

『御免さい、御免なさい』、子象君は出来るだけ丁寧に申しました。『あのう、父さんも僕を蹴つ飛ばしました。母さんも蹴つ飛ばしました。それから背高の駝鳥叔母さんも、ノッポのキリン叔父さんも、エ、それやひびく僕を蹴つ飛ばすんです。それから肥つちよの河馬叔母さんも、毛むくぢやの狒々猿叔父さんも、あの鱗だらけのザラ、くした尻尾を持つてくる大蛇の小父さんも、——え、あの小父さんは一等ひびく蹴つ飛ばしましたよ。チエ、小父さんもやつぱり僕を蹴つ飛ばすんですよ。ぢあ、僕もう蹴つ飛ばされるのはいやだ』。



『小僧さん、小僧さん、こゝへお出で、わしが、お前、その鰐さんなんだよ。』鰐さんはそう言つて、偽ぢやアないといふ代りに、「鰐の眼に涙を一杯浮べて申しました。

で子象君は、もう胸一杯にこみ上げて来て、河岸へベタベタミ座つてしまひました。まあ、小父さんですか。僕が此向から、こんなに探してた鰐さんは、そうですか。——ぢや、小父さん、ネ、言つて下さい、小父さんは御馳走に何を食べるんです。』

『小僧さん、小僧さん、一寸こゝへお出で。』鰐さんは申しました。『ゾーッ、小さい聲で言つてあげるからネ。』

で子象君は顔を、鰐さんの口のすぐ側へ持つてゆきました。するま鰐さんは、突然子象君の小つちやなお鼻を——みなさん、この時までは子象さんのお鼻は、ホラ、長靴くらゐの小つちやいお鼻だつたんでせう——その子象君のお鼻にガブッミ一つ食ひつきました。

『ヨシ、今日は一つ、象の子供から御馳走にならうかな。』鰐さんは——ホラ、こんな風に子象君のお鼻をくはえたまふ、口の中で申しました。

サア、びつくりしましたネ、子象君は。そして鼻聲で申しました。「放して下さい、放して下さい。小父さん、駄目ですよ。』

丁度そこへ、さつきの大蛇が、ゾロゾロ河岸を降りて来て、「ヤイ、小僧、早く引張るんだ。早く引張るんだ。でないネ、ホーラ、あの向ふの水の中に、見るまに引摺りこまれてしまふぞ。』

子象君はそこで可愛い尻餅をベタンミついて、カ一杯、エンヤラサ、エンヤラサミ、引張りました、引張りました、引張りましたネエ。するま、子象君のお鼻がだんぐだんぐ伸びてきました。鰐さんは、大きな尻尾をひきくバタ／＼させて、あたりの水をはねっかへしながら、だんぐ／＼水の中に退つてゆきます。そしていよく強く引張りました、ウントコドッコイ、ウントコドッコイ。

子象君のお鼻は益々伸びてきます。子象さんは可愛らしい四つの足を力一杯踏ん張つて、エンヤラサ、エンヤラサ、引張りましたネ。お鼻はまだぐ／＼／＼伸びてきます。鰐さんは鰐さんで、尻尾をボートのオールのように動かし

て、これもウントコ、ドッコイ、ウントコ、ドッコイ、引張りましたネ。そして力を入れるたびにお鼻はみるみる伸びてきました。

子象君はさうかするミ力を入れた足が滑りそうな気がしました。もうたまらなくなつて、鼻聲で——お鼻さいいへば、もうさつきから、かれこれ五尺位に伸びてしまひました。——『ひぎいや、ひぎいや、あんまりひぎいや』。ミ泣き出してしまひました。

するささつきの眞黒な大蛇がスル／＼ミ降りて来て、子象君の後足にキリ／＼ミ二まはりほごからみつきました。そして、『ヤイ、ヤイ、粗忽そそかし屋の小僧、サア二人で一踏み張り踏ん張るんだぞ。でないミ彼奴のために一生不具者かたわになるかも知れねえぞ』。

サア、そこで眞黒い大蛇もエンヤラサ、子象君もエンヤラサ、鰐さんもエンヤラサ、みんなで懸命に引張りました。でも到頭子象君ミ大蛇ミが引張り勝つて、バチン!!ミそれはそれは四邊一面あたりに響き渡るやうな大きな音がしたミ思ふミ、流石の鰐さんも到頭子象君のお鼻を放しました。

ミたんに子象君は見事トンボ返りを打つて轉がりましたが、でも何より先に大蛇に有難うミ御禮を言つて、それから可哀さうにすつかり伸びてしまつたお鼻の介抱にさりかかりました。冷めたい大きなバナナの葉つばにお鼻をすつかりくるんで、河の水の中にソーツミ浸して冷やしました。

『そんなこころをして、何になるのだ』大蛇が申しました。

『御免なさい』子象君は申しました。『でも僕の鼻こんなになつちやつたんです、僕、鼻のちぢむのを待つてるんですよ。』

『そんなこころをしちや、日が暮れるわい』。大蛇は申しました。『わからん奴が居るもんだ』。

子象君は三日の間そこでお鼻のちぢむのを待つて居りました。だがお鼻は短くなるどころか、おまけに子象君の眼玉はだん／＼簸睨みになつて參りました。だつて、みなさん、鰐さんに引張られたゝめに、子象君のお鼻は、今みなさんの御覽になる、あの象の長いお鼻そつくりになつてしまつたのですもの。

丁度三日目の、それももう日も暮れかゝる頃でした。ふ

ミ一匹の蟲がブーンミ飛んで来るミ、子象君の肩をチクリミ刺しました。子象君はハツミ思ふミたんに、長くなつたお鼻の先をヒョイミ上げるミ、ピシャツミその蟲をたゞき殺してしまいました。

『巧いぞッ!!』ミ大蛇が申しました。『成程、チンチクリンの鼻ぢや、こいつは出来ないや。今度は一つ何か食べて御覽よ。』

子象君は別に何んミいふ考へもなしに、お鼻をヒョイミ伸ばして、一株の草を根つこから、ボリ／＼ミ引つこ抜きました。そして前足でバタ／＼ミ土を落すミ、そのまゝお鼻の先で口の中へムシャムシャミ押しこみました。

『巧いぞッ!!』ミまたしても大蛇は申しました。『成程、チンチクリンの鼻ぢや、こいつは出来ないや。小僧さん、此處はお太陽様てんやうさまが暑かないかネ。』

『エ、暑いですネ。』ミ子象君はそう申しますミ、つい何の氣もなしに、河岸の泥をお鼻の先ですくひ上げて、自分の頭の上にこすりつけました。ミみるまに耳の後ろまで、それは氣持のよい、冷めたい日除帽子が見事に出来上りま

した。

『巧いぞッ!!』ミまたしても大蛇は申しました。『成程、チンチクリンの鼻ぢや、こいつは出来ないや。ミこころでござうだい、も一度誰れかに蹴飛ばしてもらつちやあ。』

『御免なさい、御免なさい。』子象君は申しました。『僕もうあれだけは眞平ですよ。』

『ぢや、今度は一つ他人を蹴つ飛ばす方はござうだい。』大蛇は申しました。

『エ、僕、是非一つやつてみたいなあー。』

子象君は申しました。

『うん、大蛇は申しました。『お前さんのその新しい鼻ぢがネ、こいつは他人を跳飛ばすには、全くいゝようだな。』

『小父さん、有難う。』子象君は申しました。『僕、きつミ忘れないや。小父さん、僕ネ、家へ歸つたらきつミやつてみますよ。』

そこで小象君は、お鼻をブラ／＼させながら大急ぎで歸つて參りました。果物が食べたくなるミ、もう今迄のやうに枝から落ちるのを待つて居なくとも、いくらでも木から

お鼻でもぎこりしました。草が欲しくなるを、今迄のやうに

一々お座りしなくても、ドンドン地面からむしりこつて食べました。蟲が刺せば、大きな木の枝をへし折つて、まるで蠅たゝきのやうに振り廻しました。陽がカンカンあつてくれば、早速例のつめたい泥の日除帽子をこさへました。また歩きながら淋しくなるを、長いお鼻でひこり鼻歌を歌つてゐました。長いお鼻は樂隊よりも大きな音をたてました。それから子象君はわざ／＼廻り路をして、肥つちよの河馬さんを訪問しました。そして大蛇の言つたこゝが眞實かどうか、思ひきりうん／＼一つ河馬さんをはねこばしてやりました。そして用事のない時は往き路に吐き散らしていつたメロンの外反を一つ一つお鼻の先で拾つて歩きました。——だつて子象君は大變綺麗好きだつたのです。

である暗い晩、子象君は到頭なつかしいお家へ歸つて参りました。そこで、まつお鼻をキリキリ巻いて、『今日は』と申しました。みんなそれはそれは大喜びに、喜んでくれましたが、もうすぐその後から、『サア、お出で、お出で、小さい聞きたがり屋さん、一つ僕等で蹴飛ばしてあげるか

ら』と申しました。

『ブッ!!!』子象君は吹き出しました。蹴飛ばすなんて、君達に何がわかるもんかい。僕は知つてるんだ。一つ今見せてやるよ。

と言つたと思ふに、子象君は長いお鼻をスルスルッ伸ばして、二人の兄さん達をまた／＼くまにコロコロッ引くり返してしまひました。

『ウワァー、お前は何處でそんな藝當を習つて來たんだ!! 一體その鼻はどうしたんだ!!』

『僕はネ、僕はネ、あの向ふの大きな河の岸に住んでる鱧の小父さんから、この鼻をもらつたんだい』。子象君は申しました。『僕ネ、小父さん、御馳走に何を食べるんだいつて聞いたら、小父さんがネ、これを持つてつけてくれたんだよ』。

『随分みつきもない鼻だなあ』。と毛むくぢやの狒々猿叔父さんが申しました。

『そりやそら』。と子象君は申しました。『だけき便利だよ。ホラ!!』と言つたかと思ふに、毛むくぢやの狒々猿叔父

さんの毛むくぢやの片つ方の足を、ヒョイヒ引掛けて、大熊蜂の巢の方へゴムまりのやうに投げ上げました。

それから子象君は背高の駝鳥叔母さんの尻尾の羽根を引つこ抜くやら、ノッポのキリン叔父さんの後足をつかまへて、藪中を引摺りまはずやら、肥つちよの河馬叔母さんに怒鳴りちらして、叔母さんが水の中で、食後のお晝寝をして居るまごころを、耳の中に水を吹きこむやら、それはそれは悪戯つ子の子象君は、まるで家中を相手に、大暴れに暴れ出しました。で到頭みんなもびつくりするやら、あきれるやら、すつかりカンカンに怒つてしまひました。でも子象君は、コロコロ烏にだけは少しも亂暴をしませんでした。

すつかり大騒動になつてしまつて、家中のものは思ひ思ひに大急ぎで、あのユーカーリの樹の繁つてゐる大きな河の岸へこ、ゾロゾロ、ゾロゾロ出懸けて参りました、みんな鱈さんから、新しいお鼻を借りようといふつもりなんです。やがてみんなが歸つて参りました時には、もうお互に蹴飛ばしあつたりするものは一人もありませんでした。みなさん、その時以來、みなさんの御覽になる象はみんな、

あの聞きたがり屋の子象君のお鼻こそつくりな長い長いお鼻を持つやうになりましたトサ。

(五九頁のつゞき)

米糠は直ちには吸収されませんので是は堆肥又は腐葉土等を作る場合にその間に混じておく方がよいのであります。米のまぎ汁は灌水の代りに時々やるやうに致します。

次に草木灰も保存の時は雨水のかゝらない所におき使用の折は土に混じて用ひたり植付けしてある間に施す場合には畦の間を淺く掘りこの中に草木灰を撒き又上に覆土しておくのであります。

この外藥劑の撒布もしなければなりません。是は次回に述べる事と致します。

尙この期を逸する事の出来ないのは春播の草花を下種する事ではありますが名稱等に就ては既に申し述べてありますのでこの度又重ねる要もないと思ひますから省略致します。

## そのひんがし

S · K 生

ほつとした顔ミでもいふのであらう。保育修了式の後の茶話會をすませて、千きも達や親達を送り出した後を、保姆室の小卓を圍んでみんなでお茶を飲んでゐるところである。茶話會が賑かであつたゞけに、園内が一層しんみしてゐる。その靜かさの中に、先生達は今歸つて行つた一人一人の子きものを追ふてゐるのらしい。

「ほんこに、あの子は……」

心なしか、A先生の目がぬれてゐるやうである。

「私の組の名物男でしたのよ」

B先生の頬が紅くほてつてゐる。

「けふのお菓子は嬉しそうでしたね」

C先生が、うつさりさして、ひさりごこのやうにいふ。

何にしても二ヶ年いつしよに遊んだ子きも達である。抱いてゐた小鳥が飛んでいつた後のやうな氣持、先生達の今の心であらう。D先生、E先生、F先生、G先生も、同僚の心持ちを預けて、いろ／＼語りあつてゐる。

茶卓の中央にはフリヂヤが白く咲いてゐる。さつきから黙つてお茶ばかり飲んでゐるのは主事である。

新學期の始まつた日、職員室の塗板に

若い芽「草も木も」を  
大切に  
する教育

ミ板書されてありました。まがふ方もなく倉橋主事の御筆跡。

園のお庭には、こゝ數日前に桃や栗、柿梅等の苗木が植ゑられたのでした。それを、大きい組になつたので、何か枯木の刀でもさして威張つて見様云ふ元氣盛りの男の兒が二三人、植木ミ間違へて手折らうさしたのでした。ひつこ抜かうさしたのでした。こんな子供達の様子が主事のお目に止まつたのです。また、クローバーの若芽が、いじらしくも踏みつけられてゐる事がちよい／＼ありますので。

## 讀者より

### 始めて幼児の友

となりて

(保育實習生感想手記)

#### A 子

昭和八年四月十一日、此の日こそ永久に記念すべき日だと思ひます。始めて幼な兒の園の門までたどりついた其の日なのですもの。

私のような者をも子供は先生と呼んで呉れました。珍らしさも手傳つてたでせうが、心から私の友達になつてくれました。中でもTちゃん——泣蟲であるだけに餘計に私を仲好しのお友達になりました。四月中はさうしても一泣

きしなければお部屋の中に入る事が出来ません。さうしても入るのが嫌な時、たつた二人きりで誰も居ないお庭の二り臺に腰かけて靜かにお話する日もありました。そんな時なごほんに私はうれいでした。まるでTちゃんの母である様なつもりになつてしまつて、

この子の氣持をさうかして眞直に素直に伸して行きたいと日夜願つて居た私でした。けれどTちゃんはやつぱり直りません。十日たつても二十日たつても、矢張りみんなの中でお話を聴く事も出来ませんし遊ぶ事も嫌なのです。或日の事又泣いて／＼さうしても會集の所へ入つて行くのを嫌がるので、又二人は取残されてお庭に居ました。何時もそうした時に坐る二り臺の下に黙つて座つてゐました。何も言ふ事はないので、黙つて。もう泣き止んだTちゃんは何か夢見るやうな目付きで一聞程先の土を眺めて居ます。私はそのTちゃんの様子を見つめてゐました。

ふと私を見上げるTちゃん、目がかつちこ合つた途端、何ごはなしに二人は微笑みました。軽い瞬間的の淡いほゝゑみ、けれど何かしら心の底に温いものがさつさ流れた様な氣がして、思はずはつみせずにはゐられませんでした。「Tちゃんお話ししてあげようか。お話を」。又いつもの癖で「もうええ」言ふと思ひの外「ふん」さうなづくのです。「カチ／＼山のお話をしてあげませうね」

「昔むかし、おじいさんとおばあさんが居たのですよ……」

まあTちゃんの顔、今まで浮かない顔をして居たものが、顔一ぱいにひろがるよるこびの色、涙の一杯たまつた眼は嬉しさうに輝いてゐる。私もぐつみ胸につき上げて來るうれしさを感じた。

「ねえTちゃん、あのお部屋の中に入つたら、こんな面白いお話が澤山聴か

れるよ、入りませうよ」話し終つた私は斯う言つた。Tちゃんも興奮からさめてホッとした様子上氣した頬をして「入る」さつた一言「そう、は入つてくれる？皆さ一しよにお話を伺ふのね」私もあまりの嬉しさに夢中になつてTちゃんを抱き上げてお部屋に入つた。

もうお歌の時間は済んでリズムが始まつてゐた。それを見たTちゃんは、私の腕からすべり下りる様にして皆の輪の中に飛込んで行つた。そして同じ様に竝んで歩いてゐる。あゝあの元氣な潑刺な幼児が今までのTちゃんなのか。あの愉快げにマーチしてゐる子か、つい先刻まであの泣いて友達嫌ひだつたTちゃんなのか。さうさうさうまで来てくれたのか、こうして一しよにリズムが出来るまでに小さい心が素直になつてくれたのか。私の前を手を振り頭を振りにこゝ／＼マーチして行く元氣Tちゃん姿を見たら、あまりの嬉

しさにこらへきれず感謝の涙が頬を傳つた。子供の前で涙を見せてはいけなはいは思ひつゝも、こらへる事が出来ない。

「有難う、Tちゃん有難う」母にも似た、いゝえ母にも増した喜びに、心の中でひたすら感謝しつゞけた。

その翌朝の事、私が幼稚園さして道を急いでゐた。もう幼稚園の門が見える、赤い煉瓦の門が、あつ誰か居る、Tちゃんだ！／＼向ふでも私の姿が見えたらしい一目散に走つて来る。いゝのよ、そんなに走りなくても、今にそこへ行くわ、まあそんなに走るさこけるわよう。

「先生、僕ね、今日もお部屋に入つて兵隊さんみたいに上手に歩くわよ。みんなさ一しよに」。

あゝTちゃん、あなたは私の氣持がすつかりわかつてくれたのね。口には出さねき心の中で叫びつゝ、仲好く手をつないで幼稚園へ。一言も明日から

皆さ一しよにお仕事しませうねこは言ひきかせもしなかつたのに、あの子は私の氣持をすつかり知つて居るのだ。この私の心からなる願を言はず語らずの中に感じてくれたのだ。心の交流、さうだ、心さこ結びつき、その成果さしてこの結果が生れて來たのであらう。

「今日も元氣で皆さ一しよにお仕事するの」

此の一言を聞きたい爲に十數日努力し、善き友眞の友たらんが爲に苦心して來た私であり、この一言を云ふ爲に早くから私の來るのを門に立つて待つて居たTちゃんなのである。

幼児こそ私の生命、全生活の目標なのである。今はもう、それを疑ふ餘地は寸分ない。幼児あるが故に、私もある。幼児の生活がそのまゝ私の生活であり、私の生活は幼児の存在によつて維持されて居るさ言つても過言ではない。



## B 子

「幼児の友なる」それは私が女學校時代、否それよりもずつ前から抱いてゐた希望だつた。家で自分が一番未

つ子として生れた故か、兄弟の愛に充分満足し又深く守られていたけり、段々生長するにつれて或る一種の物足りなさを感じる様になつた。その理由は自分に可愛い、弟妹の恵まれないといふ事だつた。「お母様、家にはどうして赤ちやんがうまれないの」これも母を困らせたものだつた。でもそれだけに道端等で無心に遊んで居る幼児の姿を見る毎に、そこに何とも云へない一種の懐しみ、親しみが湧いて、飯事、鬼ご等々の終る迄靜にたゝずんで見てゐるのだつた。

以上の様に過して來た私の念願がきき入れられてか、いよゝゝ明日より正堂々ミ大好なく、幼児の友きなつて愉快に一日を過す事が出来るかと思ふ

ミ、何とも云ひ様のない程の、嬉しくて又一面恥かしさを感じて、床に就いても愛くるしい幼児の姿や顔が目先にちらついて、いつもの如くすやくと眠にはつけなかつた。

朗らかな幼稚園行の朝は開け放たれた。

純真な神の如き幼児ミ一日を暮す。

これ程嬉しい大きい責任はない。さうぞその柔らかな心を亂さない様に心に祈りながら門をくぐる、ミ一步足をふみ入れるか入れないか同時に「先生お早うございます」ミ多くの可愛い

聲に迎へられて、私の様なものでも先生ミ云つてくれる幼児の無邪氣さには思はず頬の赤くなるのをさうする事も出来なかつた。そしてさうぞ固くるしい先生なんて云はないで、姉さんミ云つてちようだいミ云ひたくなる。こうして雨の日も風の日も幼児の聲に迎へられ、日々本當に楽しく幼児ミ共に過して來た。

「先生ミ云はれる毎に苦しい様な又一面恥しい様な嬉しい様な複雑な氣持が千々に心を亂れさせます。でもこの頃では「皆さんお早うございます」ミこちらから頭を撫でながら言へる様になつた事を大變嬉しく思つてゐる。

「先生いらつしやい、おまんじうが出來ました、ほやくの出來たてですよ」ミいふ聲に取りまかれてその等の土饅頭を買つて歩く時の喜ばしさ、現實の苦しさも何もかもすつかり水の如く流れてしまつて、そこには只さわやかな氣分あるのみ。

又時としては「先生」ミいふ三四人の聲がしたかと思ふミ、肩に腕に腰に多數の柔らかな手が身體を取り巻く「まあ、さうしませう。身體がつぶれてしまひさうだ」ミ思ひながらも、その重さ暑さなんかちつとも氣にならないばかりか、優しい手に取巻かれてゐる事を無上に嬉しく感じる。そして其處に日々伸びてゆく幼児の柔らかな心の芽生

えを感じ、今迄薄紙がかゝつてゐた様にぼんやりさしかわからなかつた幼児の姿が、日を経るに従つて一枚一枚剝ぐ様に明かに現はれて行くのに驚異の眼を見張りつゝも、日々これらの幼き者の友になつて楽しく過す事の出来る現在の身を強く／＼感謝し、感謝の中に送つて居ります。

## C 子

「始めて幼児の友になりて」

此の題が與へられた時に、私は本當に嬉しかつた。何故ならそれはずつこ以前から私の書きたいと思つてゐた事だし、又實習生活に入つてから尙一層それを切實に感ずる様になつたのである。あれも書きたい、これも書きたい。書きたい事は山程ある。

扱て、筆を執つてみては、たゞ行き詰つた。書けないのである。自分の思つてゐる半分も書き得ない。筆なごでは、さては現し得ない幼児への私のこの氣

持、始めて幼児の友に許されて實習に行つたあの日の思ひ出、胸が一ぱいになつて如何に書き表はしてゐるのか。唯一口で云へば「感謝！」そのみである。この感謝の氣持をさういふ風に書き表はしてゐるのか。私は先生からこの題を與へられたその時からずつこ考へて來たのであつた。いつも考へて居た。がさう／＼今日に至る迄結局何も書けなかつた。何も書けなかつた事は無かつたかも知れない。けれどその場のがれのあやふやな事を書くのは、幼児に對しても濟まない云ふ様な氣がして、遂に約束の期限も過ぎて今日になつてしまつた。この點いろ／＼先生にも御迷惑をおかけして本當に申譯け

ございませぬ。

\*

私が五歳の時であつた、妹が生れた。小さな可愛い、赤ん坊——幼いその頃の私はみんなにうれしかつたらう。いつも赤ん坊の側を離れないで枕許にキ

チンミ座つて、すやすや寝てゐる赤ん坊の顔をいつまでも／＼眺めてゐた。幼いながらも私の心の中に「これは私のたつた一人の赤ちゃん、私の可愛い妹なのだ」そんな氣持があつたらしい。可愛いくて／＼仕方がなかつた。

私はその五歳の時から繪本が好きであつた。「子供の友」さういふ本を毎月買つて戴いてゐたものだが、その本が來るに私は先づ妹の寝てゐるお部屋に持つて行つた。そして勿論その頃の私は字は讀めなかつたが、繪を見て妹にきかしてやつてゐるつもりで、大きな聲で繪を讀んだものである。赤ん坊——勿論幼児ではないが、その頃から私は所謂「小さき者」へ親しみを感じてゐたのである。

\*

始めて幼稚園へ實習に行く日。前の晩は、嬉しくて一睡も出来なかつた。遠い／＼彼方にある様な氣のしてゐた——あこがれ——幼児の世界を

今日からいよく訪れて行くのである。たまらない喜び——其處には喜びあるのみで、不安も無かつた、心配も無かつた。何故なら、私は絶対に彼等を信じてゐたが故に。世のすべてが私を裏切つても、幼児——彼等こそは、

彼等だけは私を見捨てはしない。——何故私がこうした力強い確信を持つに至つたか——それは小さい時から共に生活して来た妹、妹への私の心、私への妹の心、その中に流れる或るあたかい何ものか——それによつて私の心は極く少しであつたかも知れない

が、私の心は幼児の心、それになりきる事が出来た様な気がしたのである。

一週に四日の實習生活——毎日毎日が希望であり、そして満足である。この一言で、私の實習生活のすべて、幼児への私の感想を物語つて居ると思ふ。

この四月十一日から左記の方々が、女子高等師範學校保育實習科生として入學されました。

氏名	出身學校
齊藤保	福島縣立會津高等女學校
井田淑子	新潟縣相川實科高等女學校
伊佐山靜子	京畿道仁川公立高等女學校
磯野泰子	和歌山縣立和歌山高等女學校
戸川貞子	東京府立第三高等女學校
大岡薫	東京府立第二高等女學校
川野留	東京府立第五高等女學校
川上須賀	東京府立第五高等女學校
田中秀子	東京府立第五高等女學校
田中ゆき	東京女子高等師範學校附屬高等女學校
竹内喜美子	東京女子高等師範學校附屬高等女學校
谷川玲子	福岡縣門司高等女學校
工藤茂子	東京府立第五高等女學校
葛岡千枝子	東京市忍岡高等女學校
山中勝子	東京高等女學校
矢島八重	滋賀縣立天津高等女學校
矢田伊豆江	女子學習院高等科
松本菊野	神奈川縣鎌倉高等女學校
後藤富美子	東京府櫻蔭高等女學校
坂田美寶子	慶尚南道釜山公立高等女學校
北澤淑子	東京女子高等師範學校附屬高等女學校
橋川ちる	東京精華高等女學校
鈴木貞子	愛知縣第一高等女學校
末光トミ子	大分縣立第一高等女學校

# 御園兒の用品は

精選吟味した製品が總て揃へ整へて御座います。個々にお撰み遊はすより弊社へ御下命が最も割安で御負擔も輕う御座います。

品名	價	品名	價	品名	價
お道具箱	〇、二五	糊入	〇、〇五	大阪マリエ大	〇、三〇
クレオン(太)八色	〇、二〇	ボー ル切	〇、一三	同小	〇、二〇
同十色	〇、二五	ハンカチ布	〇、一三	上衣	二、五〇
同(メラ)	〇、〇三	鉛筆	〇、〇二	同ポプリン	一、〇〇
同(中太)八色	〇、一六	出席カード	〇、一〇	帽子	一、三〇
同十色	〇、二〇	マイル・ハブラシ	〇、一五	同マーク入	一、四〇
はさみ	〇、一五	ポスター名入百枚	四、〇〇	同ランドセル	一、七〇
色鉛筆(トンボ印)	〇、二五	自由畫帖上	〇、一七	上履	〇、三〇
刷毛	〇、〇五	同普及品小	〇、一二	同九丈以上	〇、四五
粘土へら	〇、〇五	環付自由畫帖	〇、一八	同フェルト製靴	〇、五五
糊へら	〇、〇一	スクラップ・ブック中	〇、一二	上靴	〇、六〇
繪定規	〇、〇五	同小	〇、〇八	同水牛底	〇、六〇
針	〇、〇八	マリエ No.1・No.2	〇、二五	草履袋	〇、一八



館ルベール 社會式株

東京 本店 神田 今川路 電話九三二七番  
大阪 支店 東區 備後 五町 電話六二八番

日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長 吉岡 郷甫  
 主幹 東京女子高等師範學校教授 倉橋 惣三  
 附屬幼稚園主事

日本幼稚園協會規則

- 第一條 本會ハ幼児教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児教育ニ篤志ナルモノトス
- 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ケ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ
- 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得
- 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ  
 一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査  
 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

- 會ノ開催  
 一、雜誌發行(毎月一回)  
 一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行  
 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介  
 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク  
 會長 一名 會務ヲ總理ス  
 主幹 一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス  
 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス  
 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ヶ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ
- 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

定價

一ヶ月分 金參拾五錢  
 半年分 金貳圓拾錢  
 一年分 金四圓拾錢  
 拾貳冊送 金貳圓拾錢  
 拾貳冊送 金貳圓拾錢

廣告

特等面一頁二面一頁  
 金參拾圓 金貳拾圓  
 一等面一頁一頁以下  
 金貳拾五圓 御斷  
 神田區駿河臺ノ言田  
 廣告社に御申込下さい

(外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい)  
 昭和九年四月十二日印刷納本  
 昭和九年四月十五日發行  
 幼兒の教育 第三十四卷 第四號

不許複製 禁止轉載

編輯者 倉橋 惣三  
 發行所 柴山 則常  
 東京市本郷區駒込林町百七十二番地  
 印刷所 杏林 舍  
 東京市小石川區大塚町三十五  
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園內

發行所

日本幼稚園協會  
 振替口座東京一七二六六番

注 文 規 定

- 一、本誌御注文の方は凡て前金(郵税共)で願ひます。(對券代用の場合には振替一割増)
- 一、御送金の場合はなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。
- 一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたし。
- 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。
- 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。
- 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

奈良女高師教授・附屬幼稚園主事 森川正雄 生著

定價三六錢 送料十二錢

〔版六十〕

# 幼稚園の理論及實際

奈良女高師教授・附屬幼稚園主事 森川正雄 生著

定價二圓八十錢 送料十六錢

〔版八〕

# 保姆教育學

奈良女高師教授・附屬幼稚園主事 森川正雄 生著

定價二圓四十錢 送料十二錢

〔版六〕

# 幼稚園教育法

奈良女高師教授・附屬幼稚園主事 森川正雄 生著

定價二圓八十錢 送料十二錢

〔版五〕

# 幼稚園の經營

奈良女高師教授・附屬幼稚園主事 森川正雄 生著

定價二圓八十錢 送料十二錢

實際的保育書 解説說書

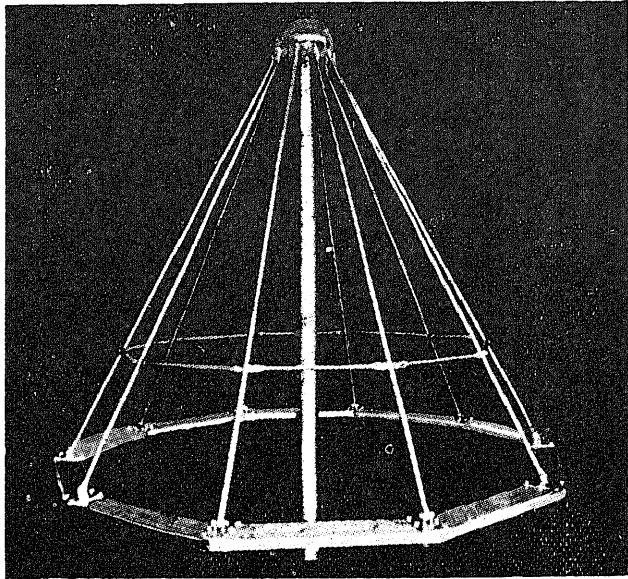
▲幼稚園の理論及び實際を詳説された邦文無二の良書  
 ▲内外の實際、古今の理論等悉く收められて遺憾なし  
 ▲幼稚園經營の諸問題解決  
 ▲保姆檢定受験者の唯一の参考書 各府縣の保姆檢定指定参考書 幼稚園書の王  
 ▲保姆指定試験規則による教育、児童心理、教授法、管理法の必須の良書で網羅せる  
 ▲教育の本書を、保育は幼稚園の理論及實際に依れば合格線以上に上達すに依れば保姆須要二大科目参考書  
 ▲躰け方、要目、保育要目、標準施設、時間配當、問題定、總て所經營の重要問題  
 ▲生活に經營の概論、幼兒の眞つき懇説し盡さる。問題等に

▲育兒法は保姆資格試驗の唯一の参考書にして又保母養成所の教科書として好適  
 ▲附録の三種工場法(一)産後保險法(二)其他諸規定  
 ▲産後保險法(一)其他諸規定  
 ▲産後保險法(一)其他諸規定  
 ▲産後保險法(一)其他諸規定  
 ▲産後保險法(一)其他諸規定

東大 京阪 東洋圖書株式會社發行

東京市神田區神保町一丁目一〇番七三番  
大阪市南區堂安町一丁目八番六五番

御園の御設備は 御整ひですか？



波動過轉塔(Ocean Wares) 八〇圓

新規の御豫算で、丈夫に安く、保育用品の御設備を遊ばす絶好期

幼稚園運動具並に保育用品に就いて二十八年の経験を有する弊社の製品は、その價格の安きに於いてその質に就いて内外の好評を博してゐます。

さてその品々のうち五六を――

- ◇鐵製椅子ブランコ……………七五圓
- ◇メリーゴラウンド……………八〇圓
- ◇太鼓梯子……………四〇圓
- ◇大形二十人乗シーソー……………七〇圓
- ◇箱積木……………一八〇圓
- ◇ヒル氏積木……………一三五圓
- ◇鐵製二人乗ブランコ……………五三圓
- ◇コンビネーション運動具……………八五圓
- ◇杵登り……………一五圓
- ◇大型鐵製滑り台……………七五圓
- ◇スモール・セット……………三二圓
- ◇樂隊遊び用樂器一揃……………一八圓
- ◇人形芝居用舞台・人形一揃……………七五圓
- ◇子供の家(社會遊び用)……………八七圓

◆御園名明記御申越次第カタログを送呈いたします。

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可  
(毎月一回十五日發行)  
昭和九年四月十二日印刷納本  
昭和九年四月十五日發行

定價三十五錢

株式會社 丸貝

本店 東京 神田 今川小路 電話九三二八七番  
出張所 大阪 東區 備後町 五ノ二番 電話木局一六三八番